

2 2182

915.6
H38

巴里繪日記

橋本鞆助著

博文館藏版

明治
45.7.2
丙寅

此書を亡兄の墓前に捧ぐ

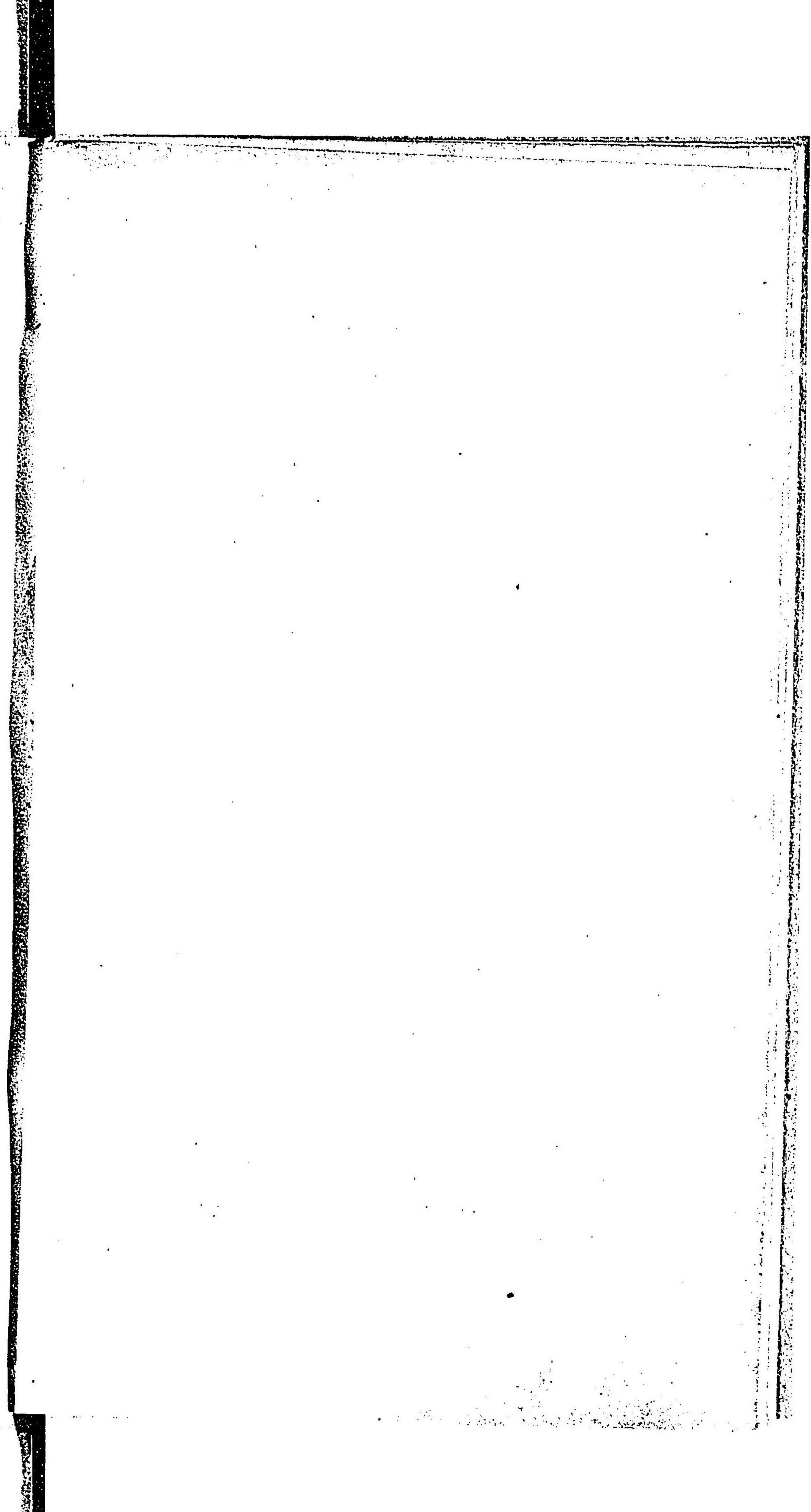
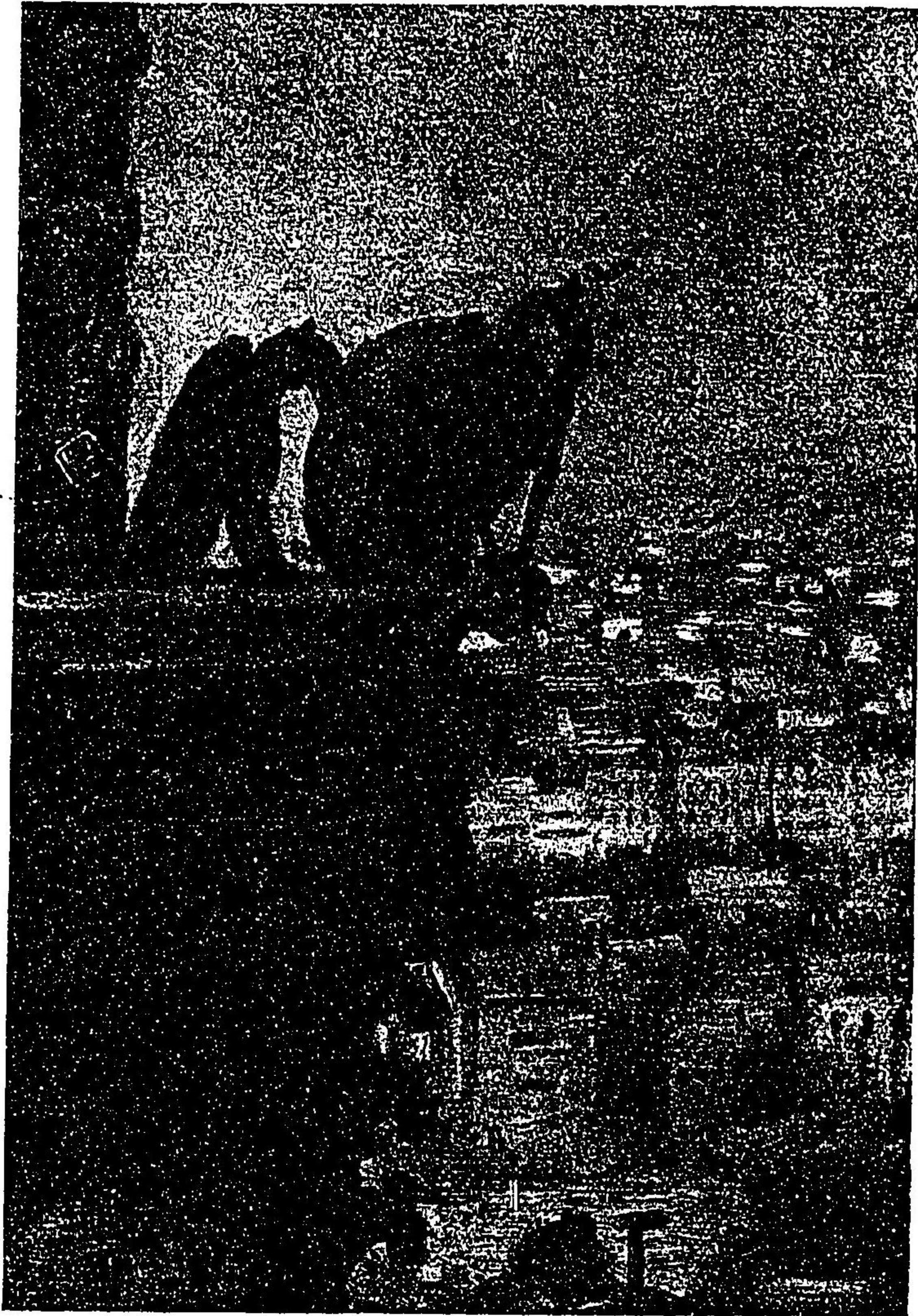
巴里繪日記の序

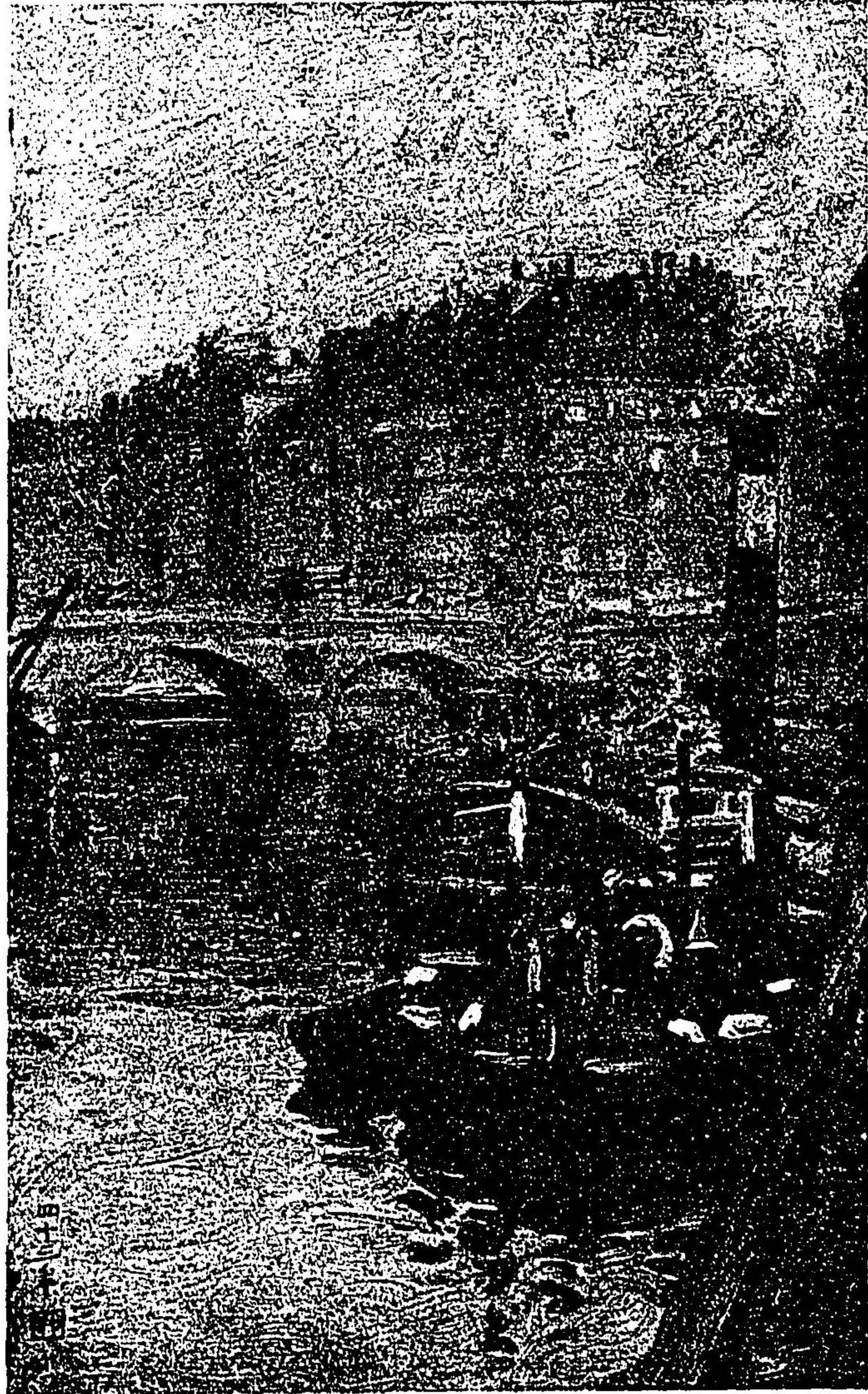
此書は、明治四十三年四月二十七日横濱を出發して、
巴里に到り、翌年七月十五日神戸に着く迄に得たる
スケッチと、日記の一部とを合せて成つたものです。
素より、學もなく、識見もない、一畫學生の繪日記なの
で、敢て大方の觀賞を得やうなどとは更に思つてゐ
ません。唯私が過去一年間、巴里にゐた紀念とする
に過ぎないのです。

明治四十五年五月二十日

森川町にて

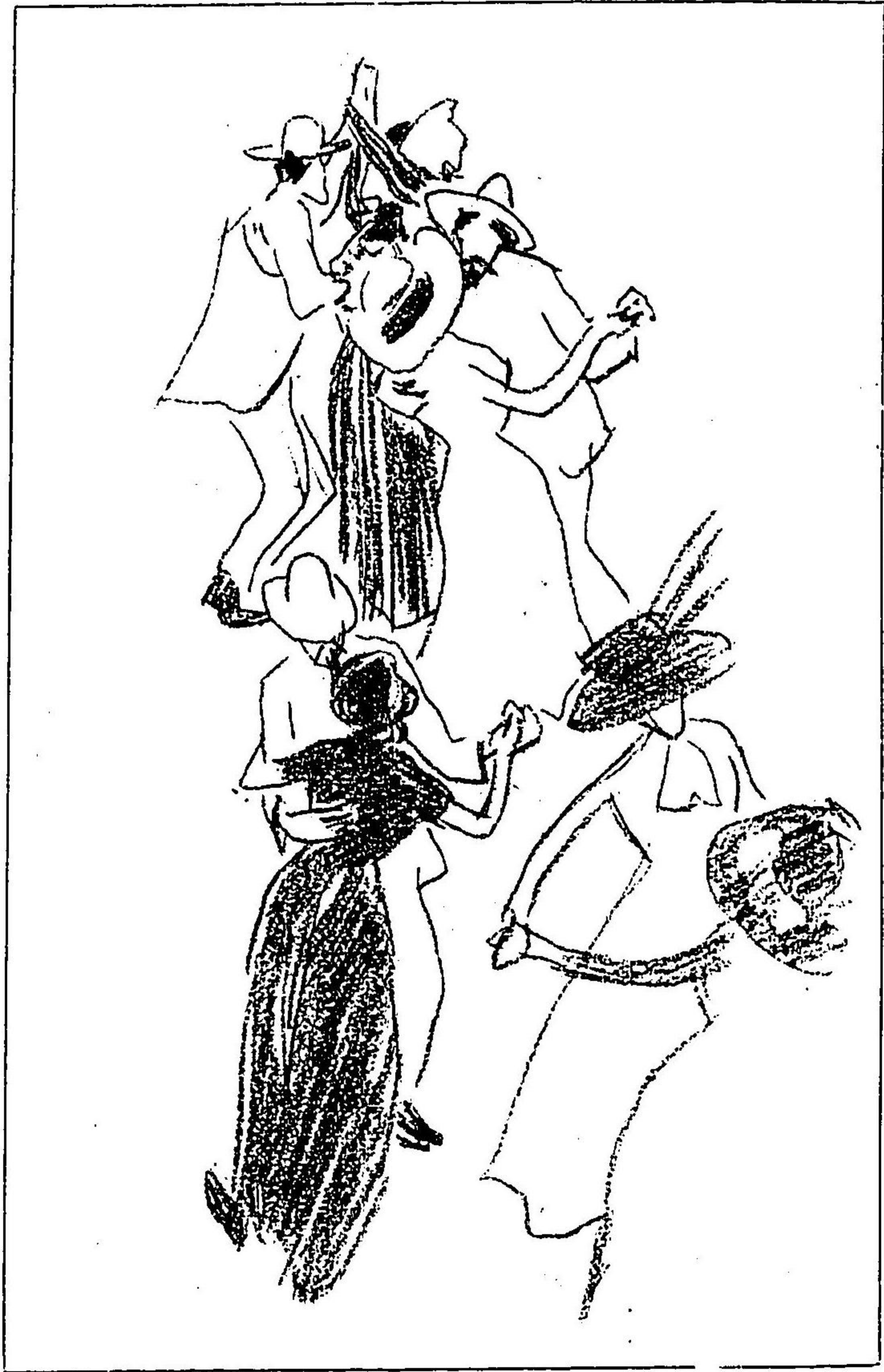
橋 本 邦 助

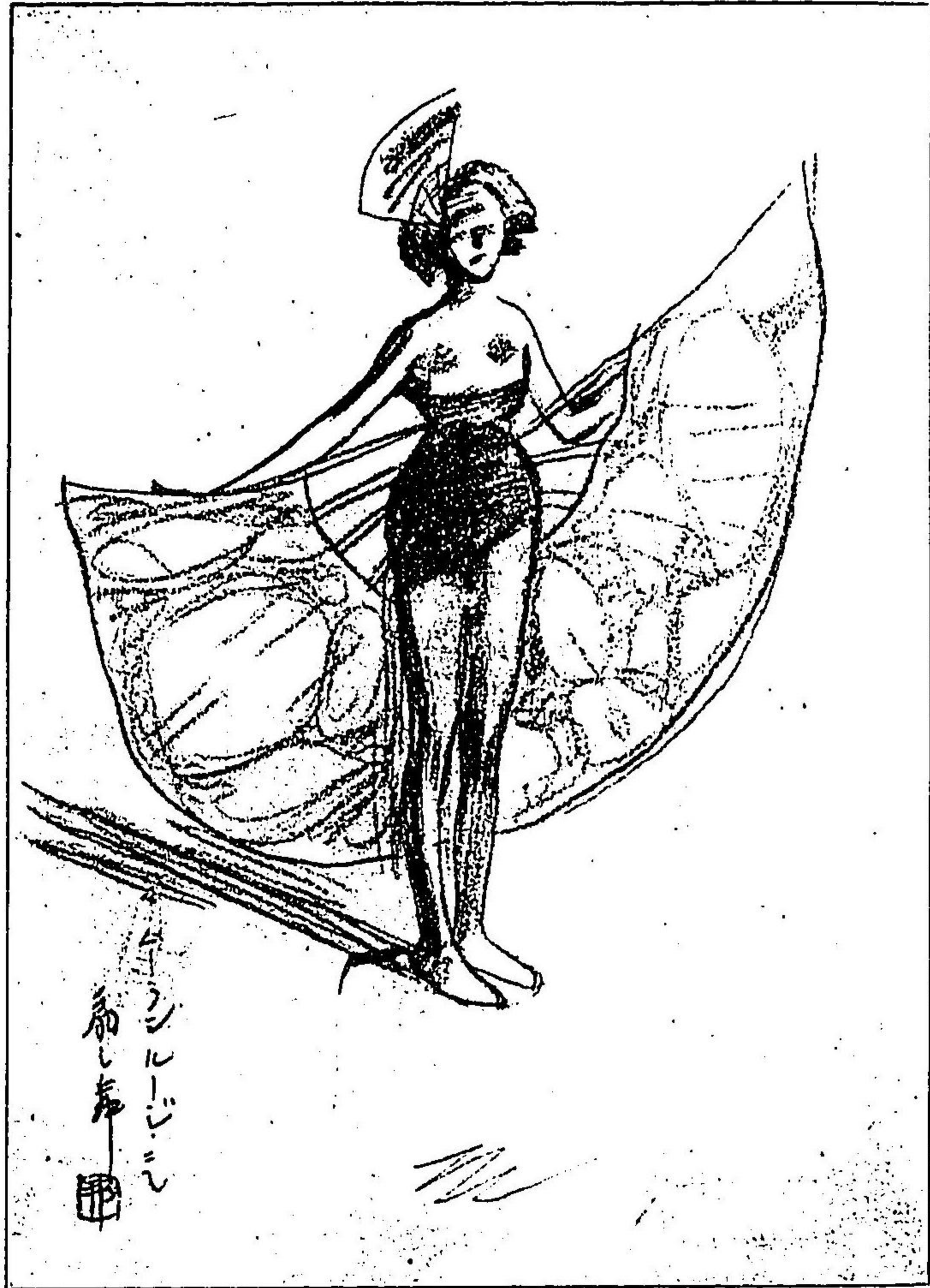


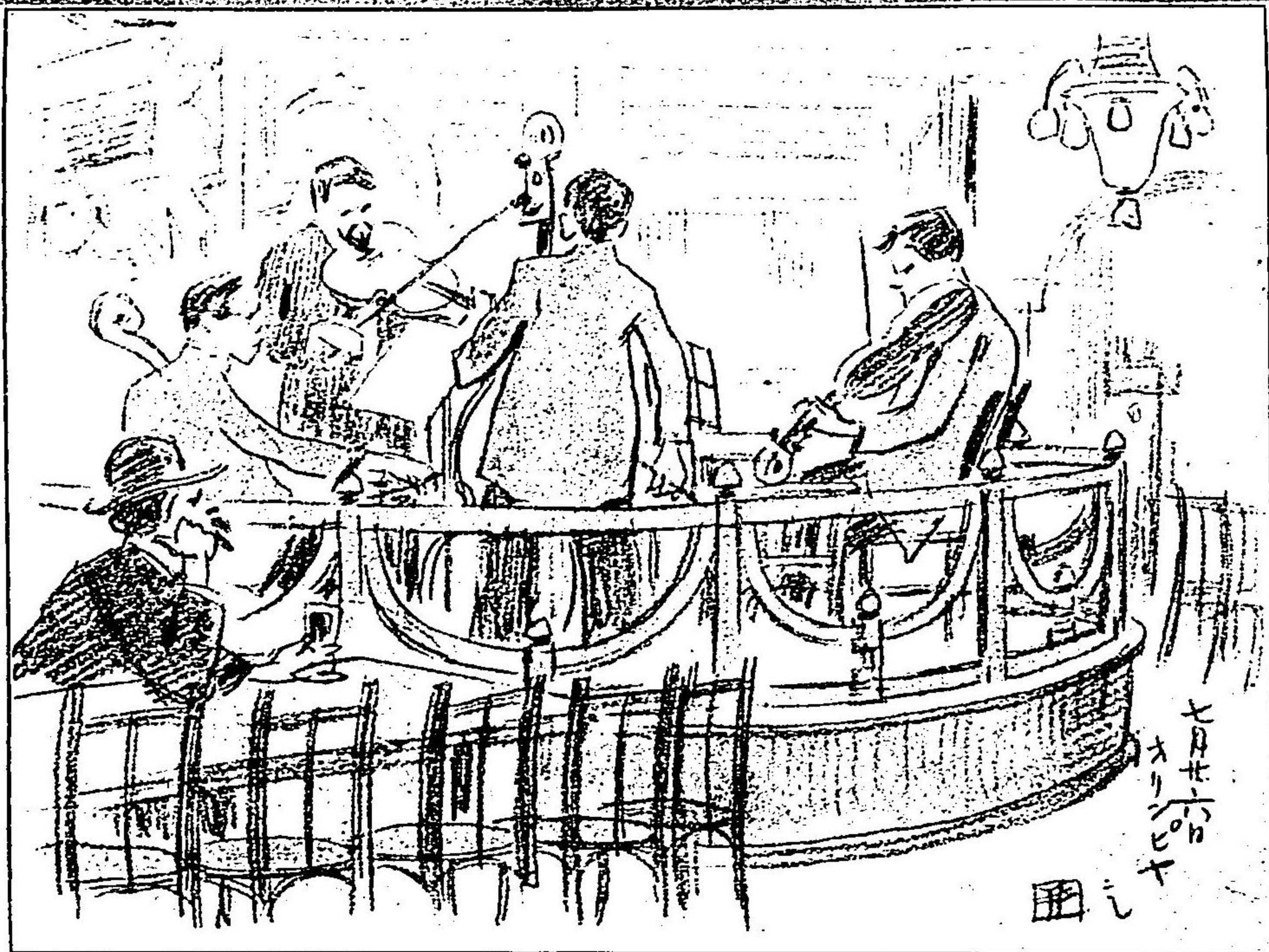
















アカデミーニロラシエ
シロフキ







黒人白人
田

时好
印



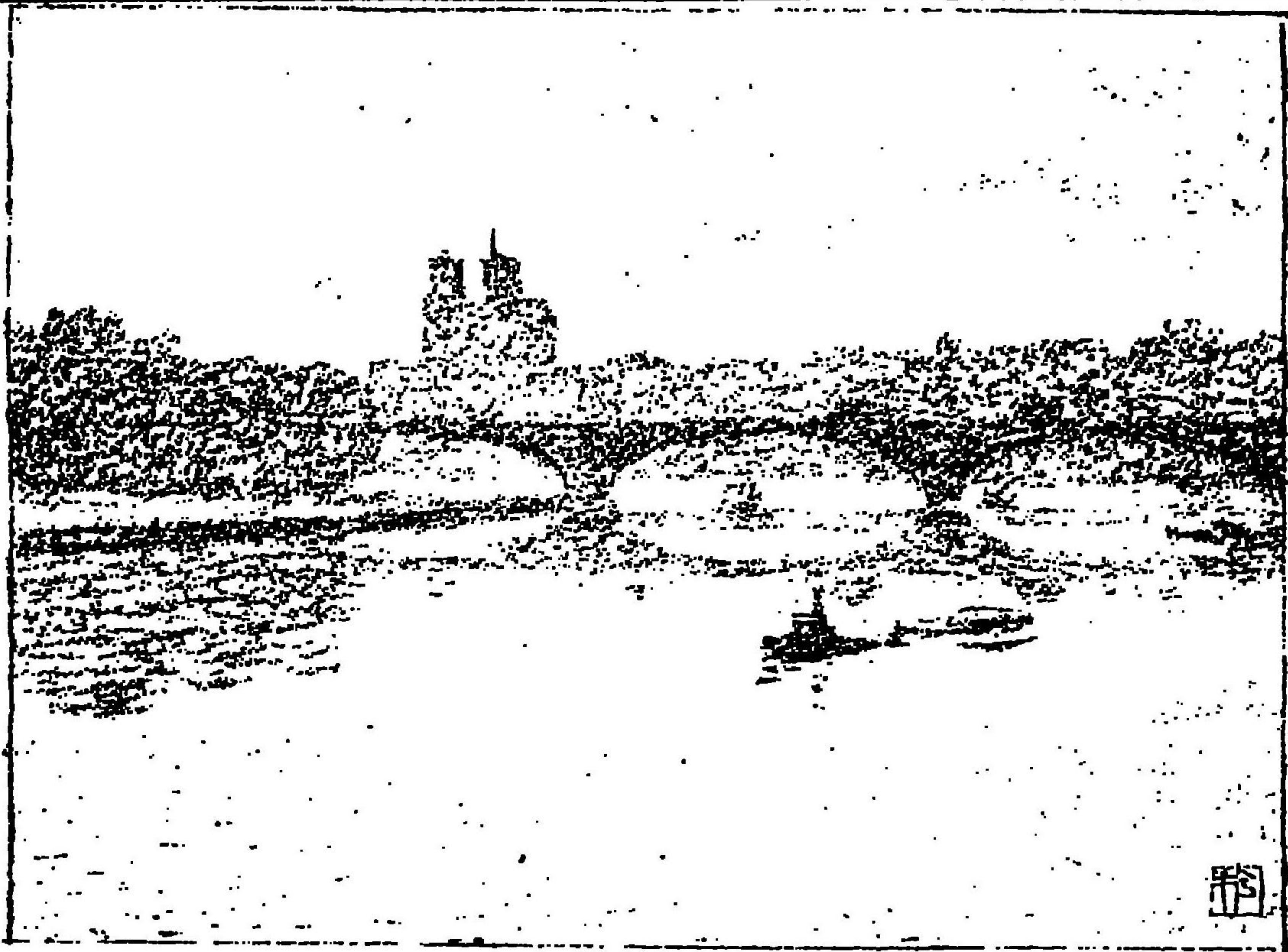


バルム
トラン
ルジ
ミ









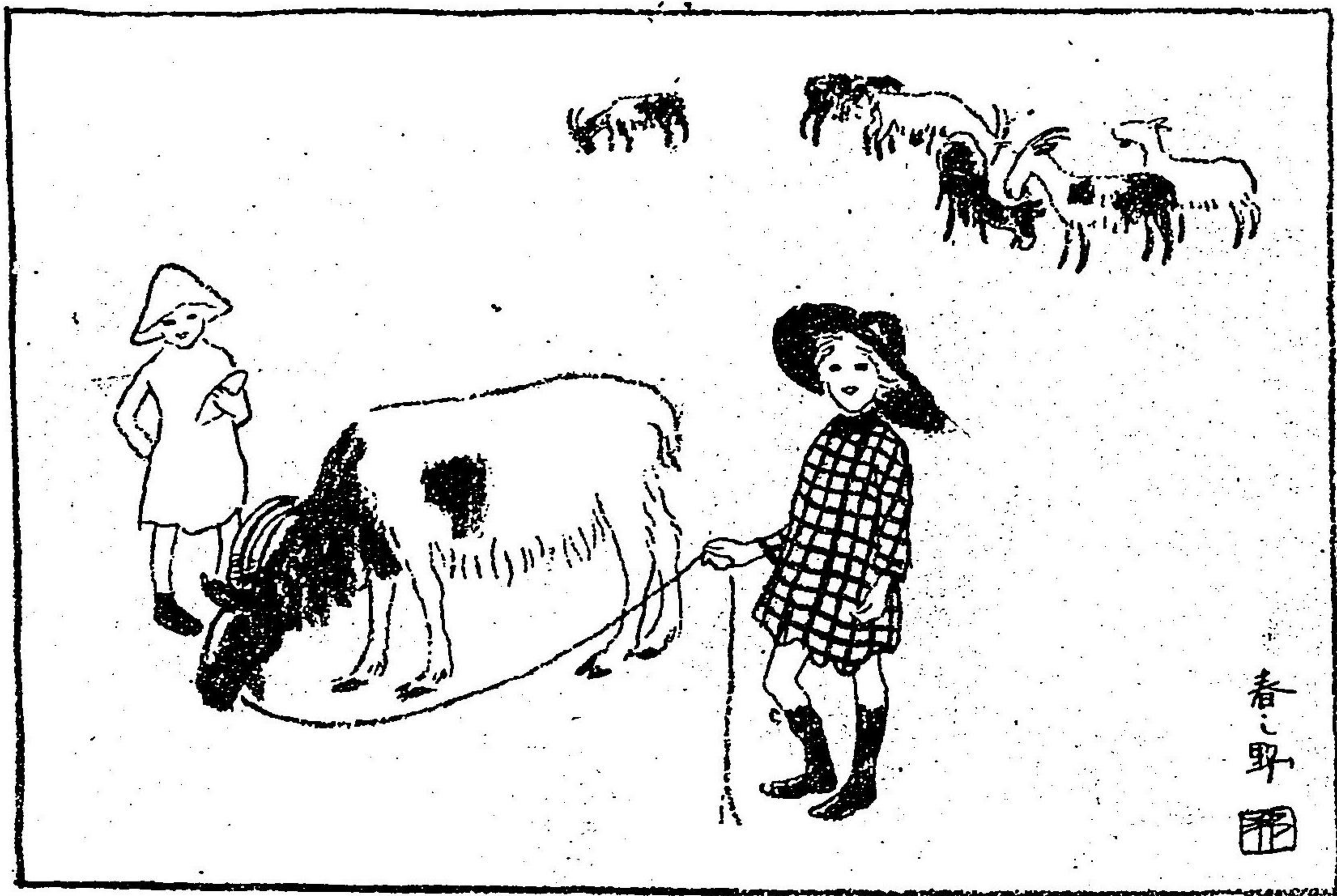
七
河
夕

印

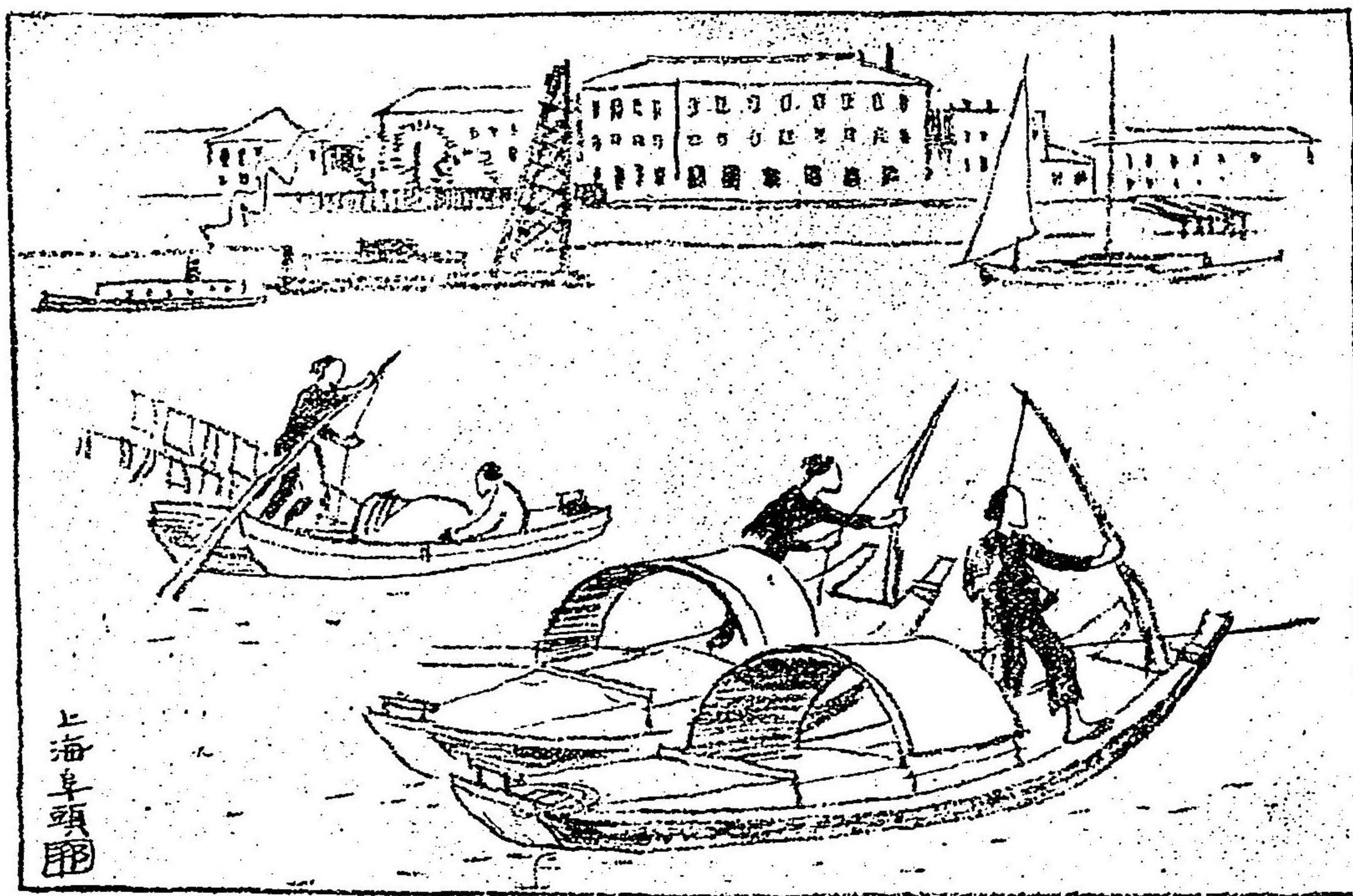






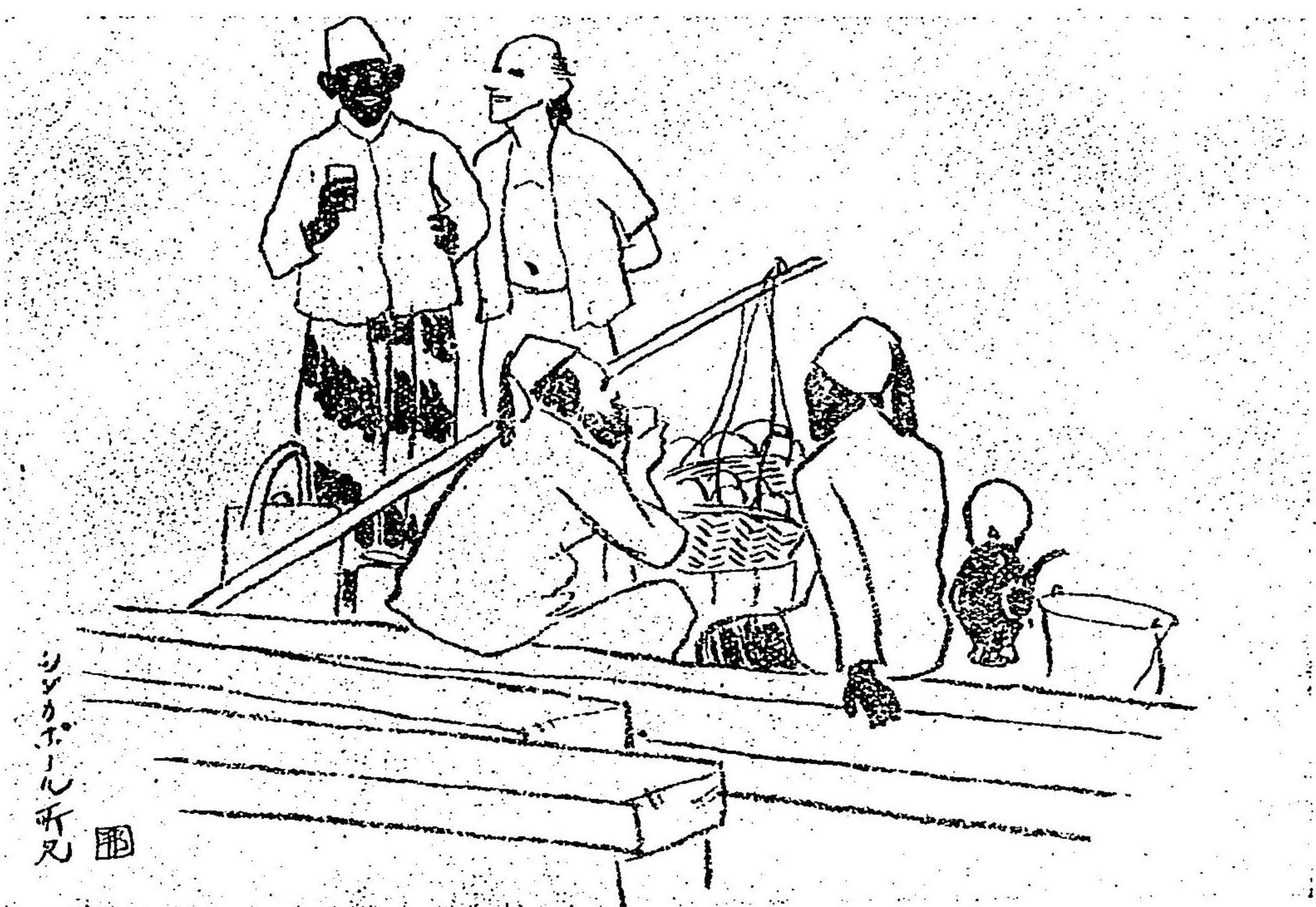


春之野
田

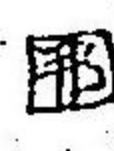


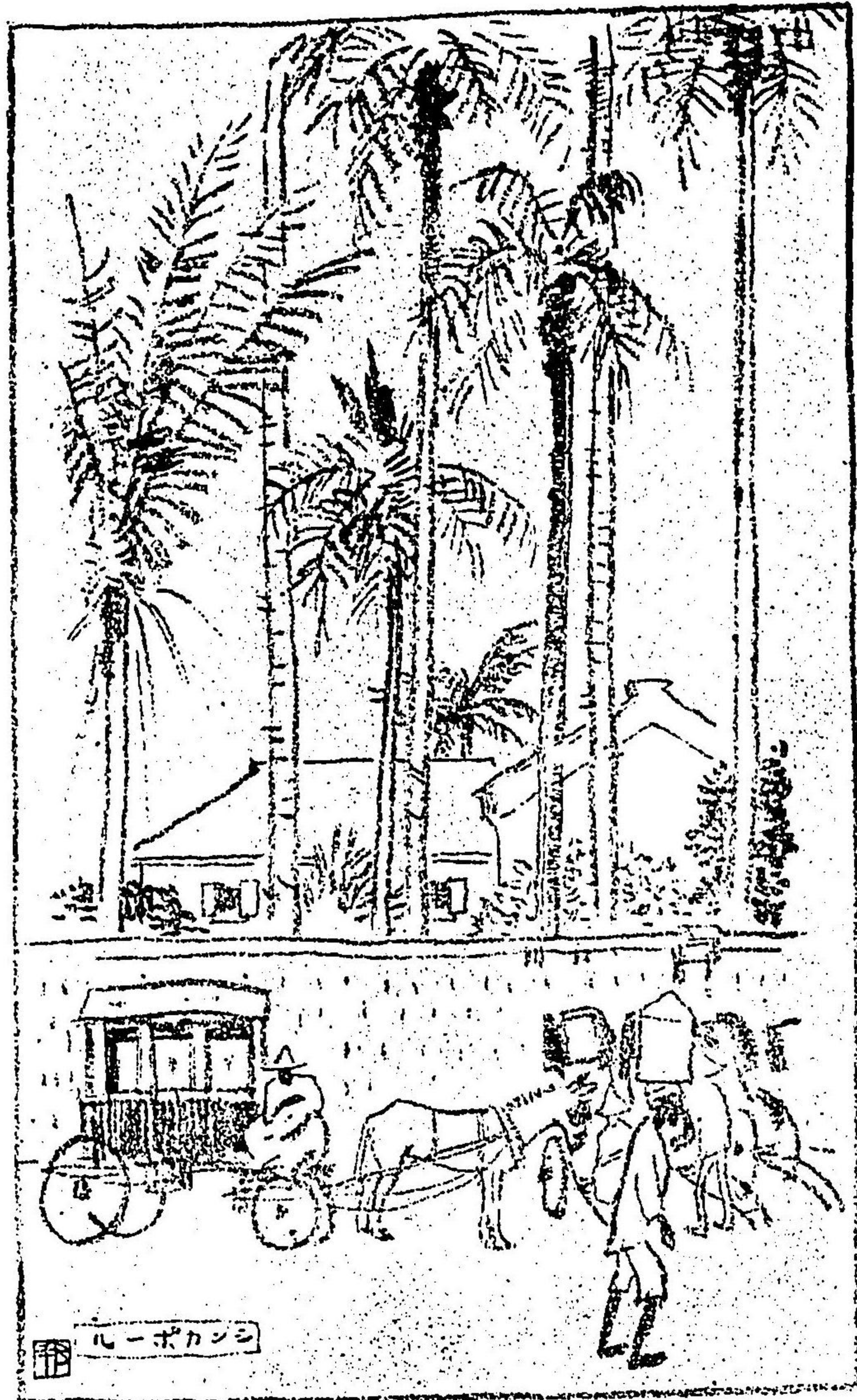
上海車頭





シンカール所見

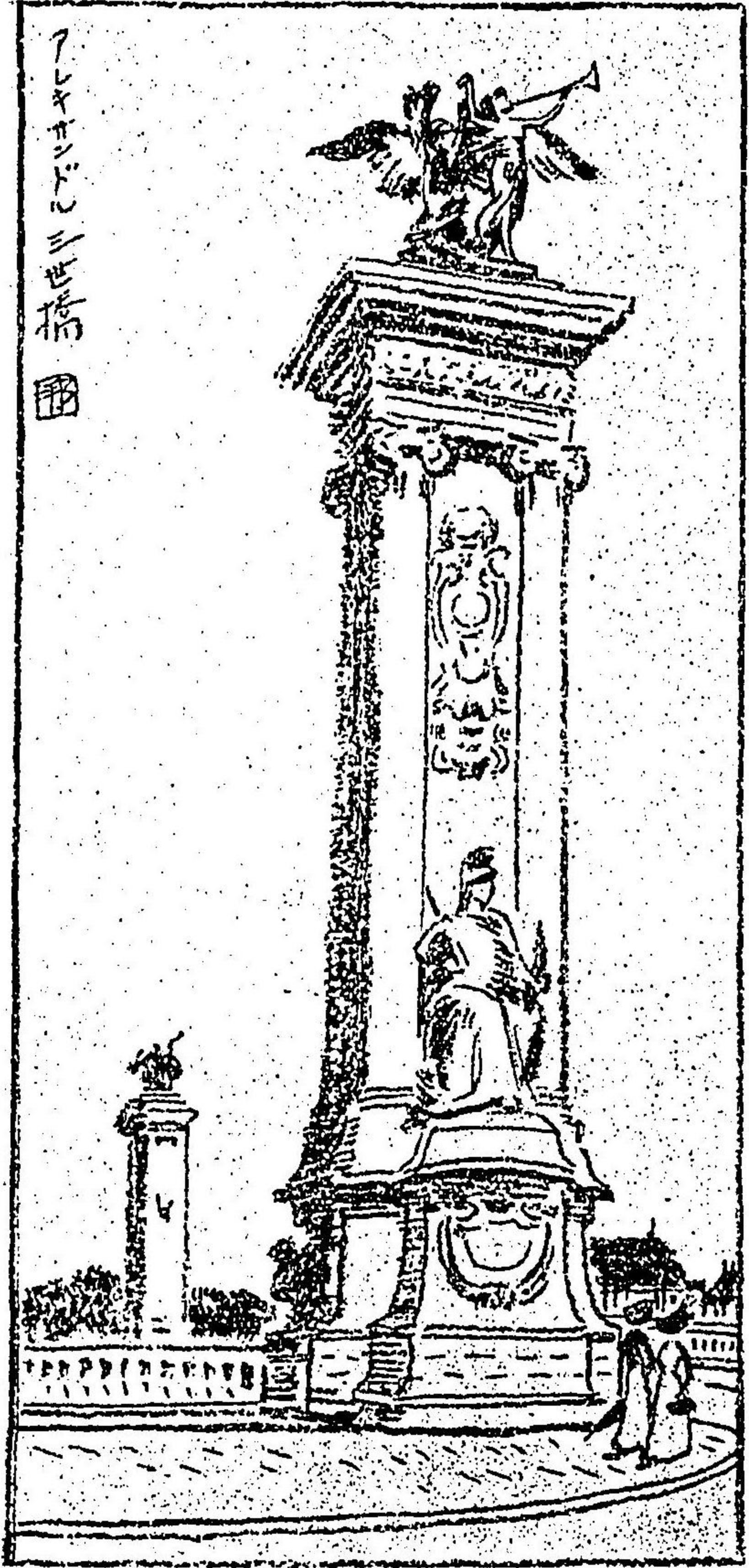




晨的印象



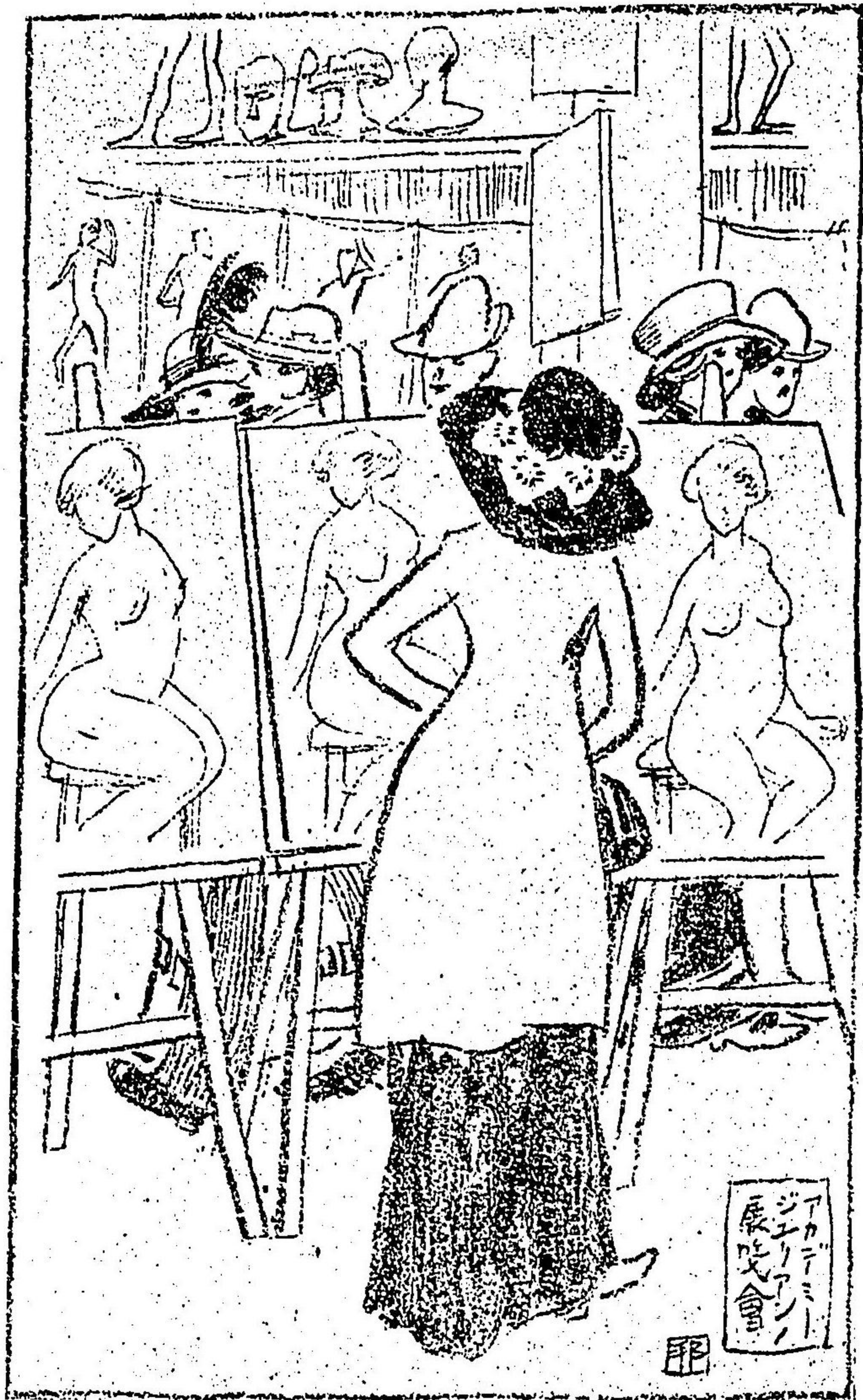




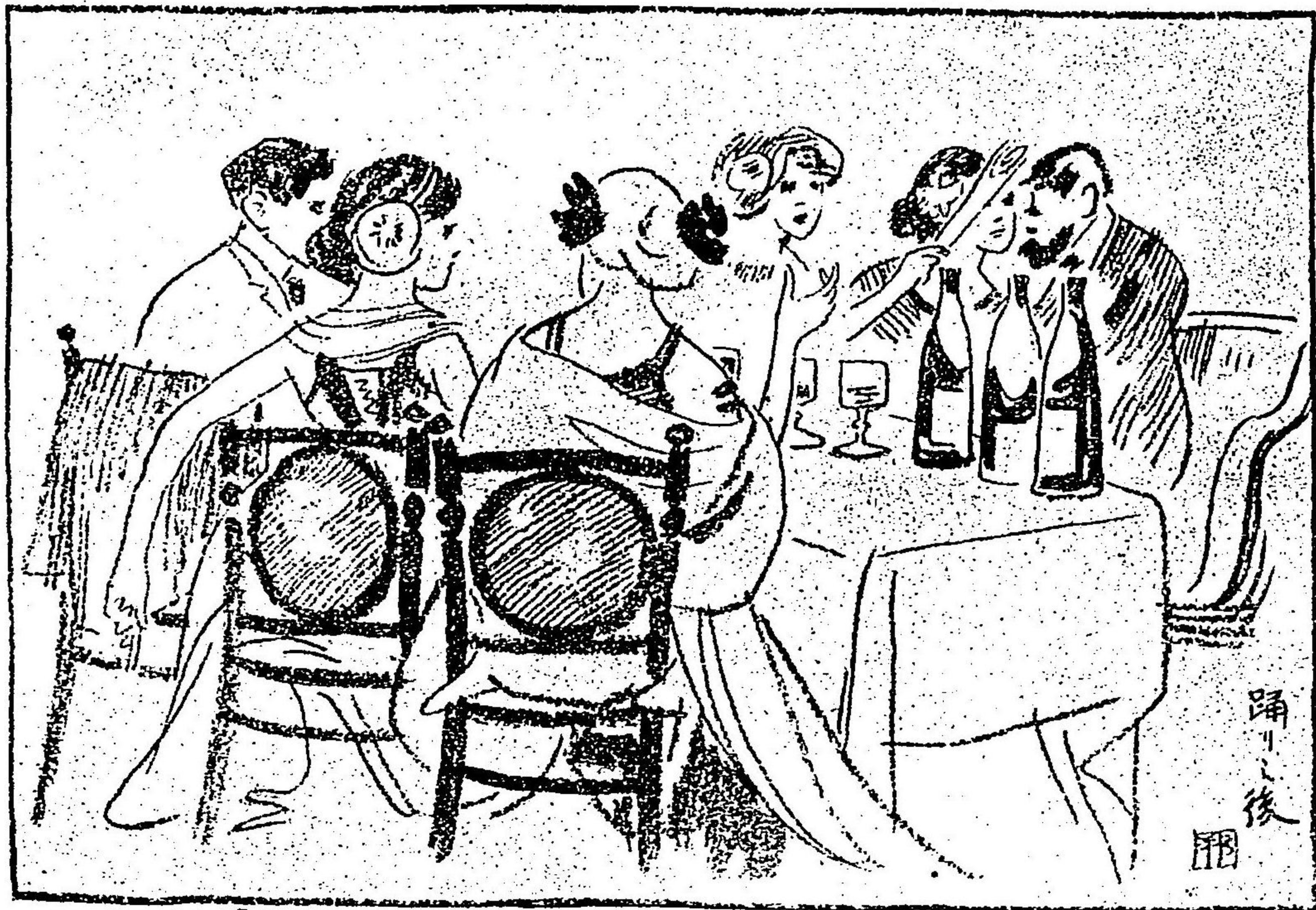
ノルマント
三世橋
印



展覽會
印



ア
カ
デ
ミ
ー
展
覧
會
印





バクハシ
印

アキハ



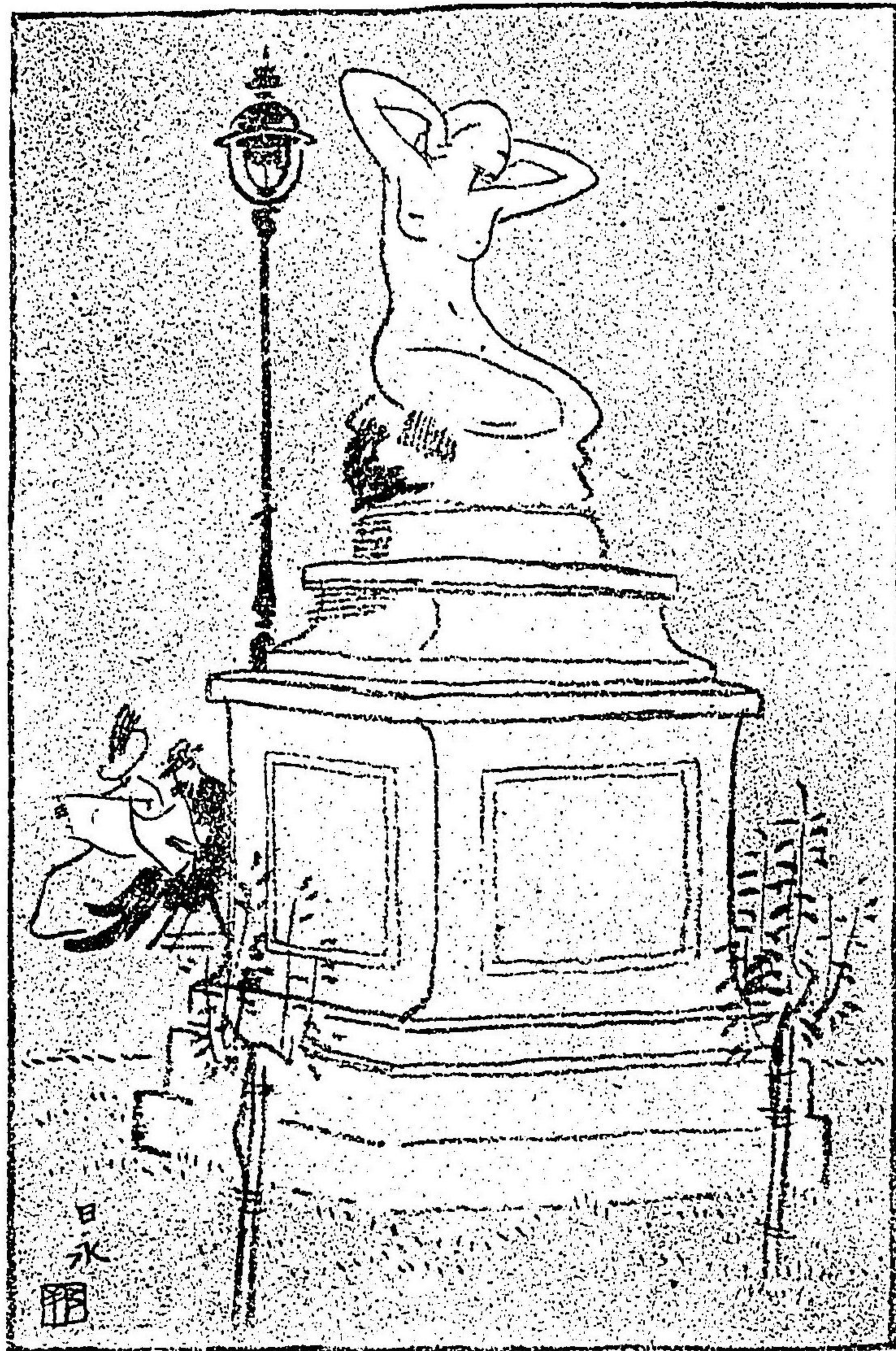


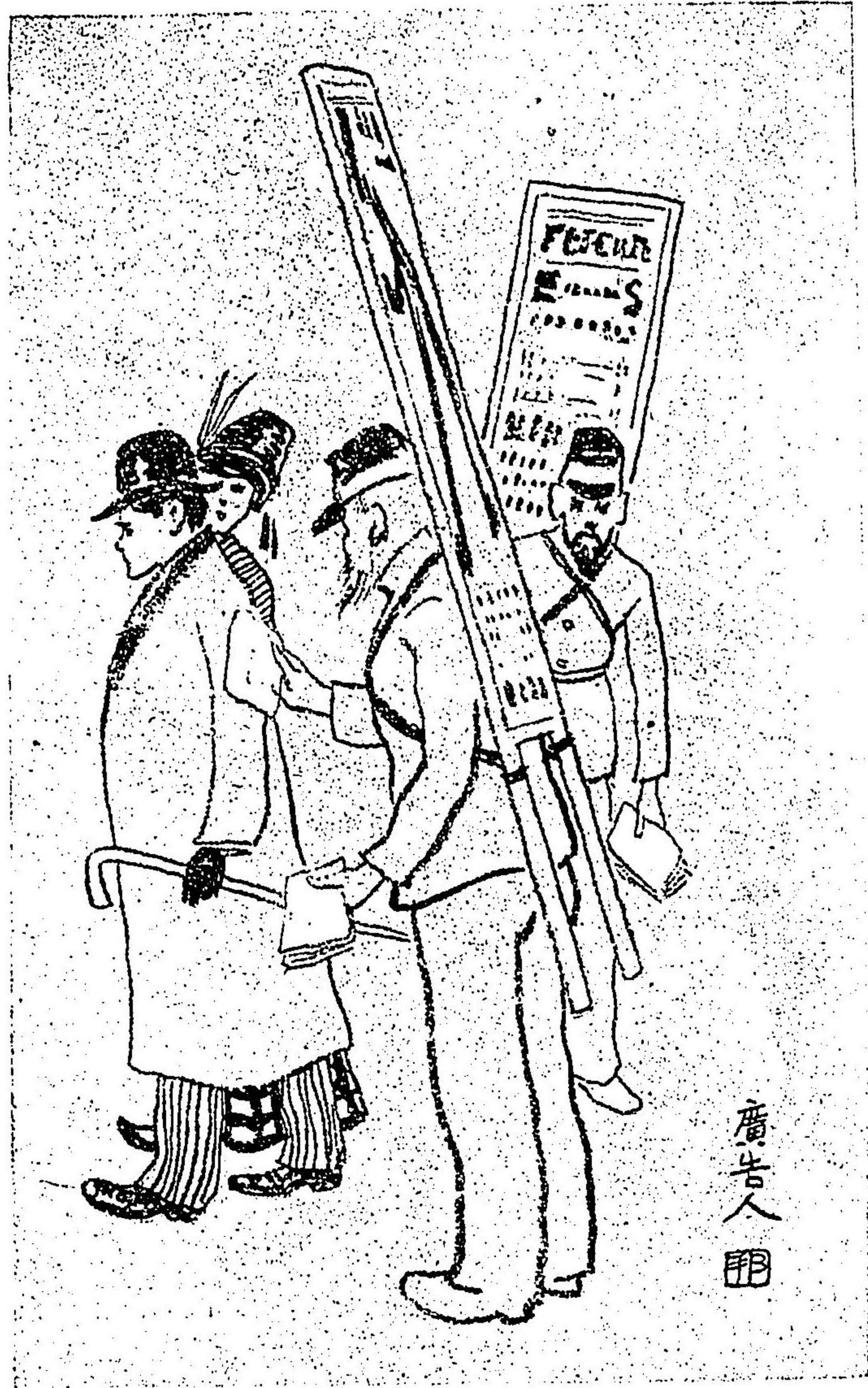








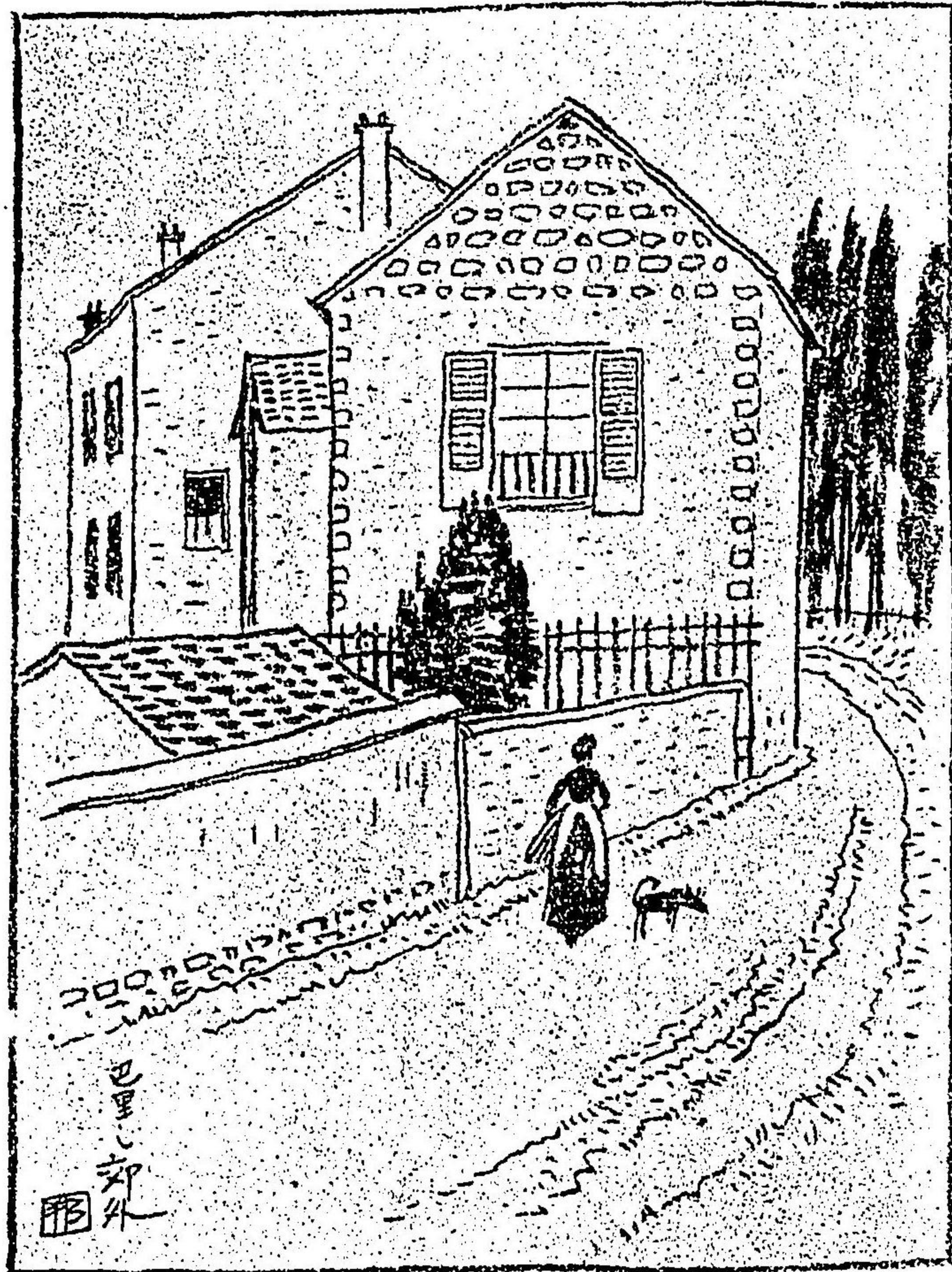


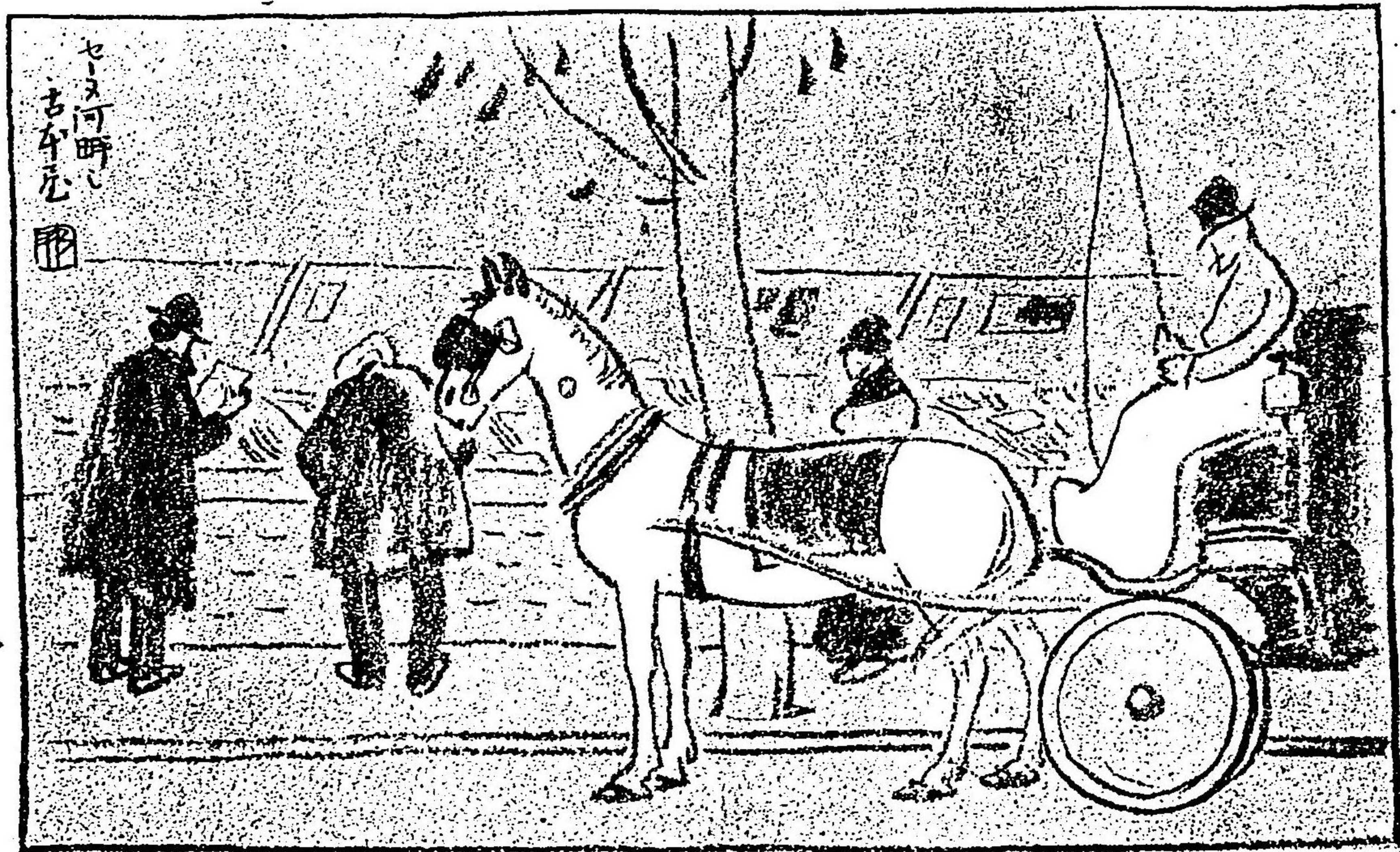


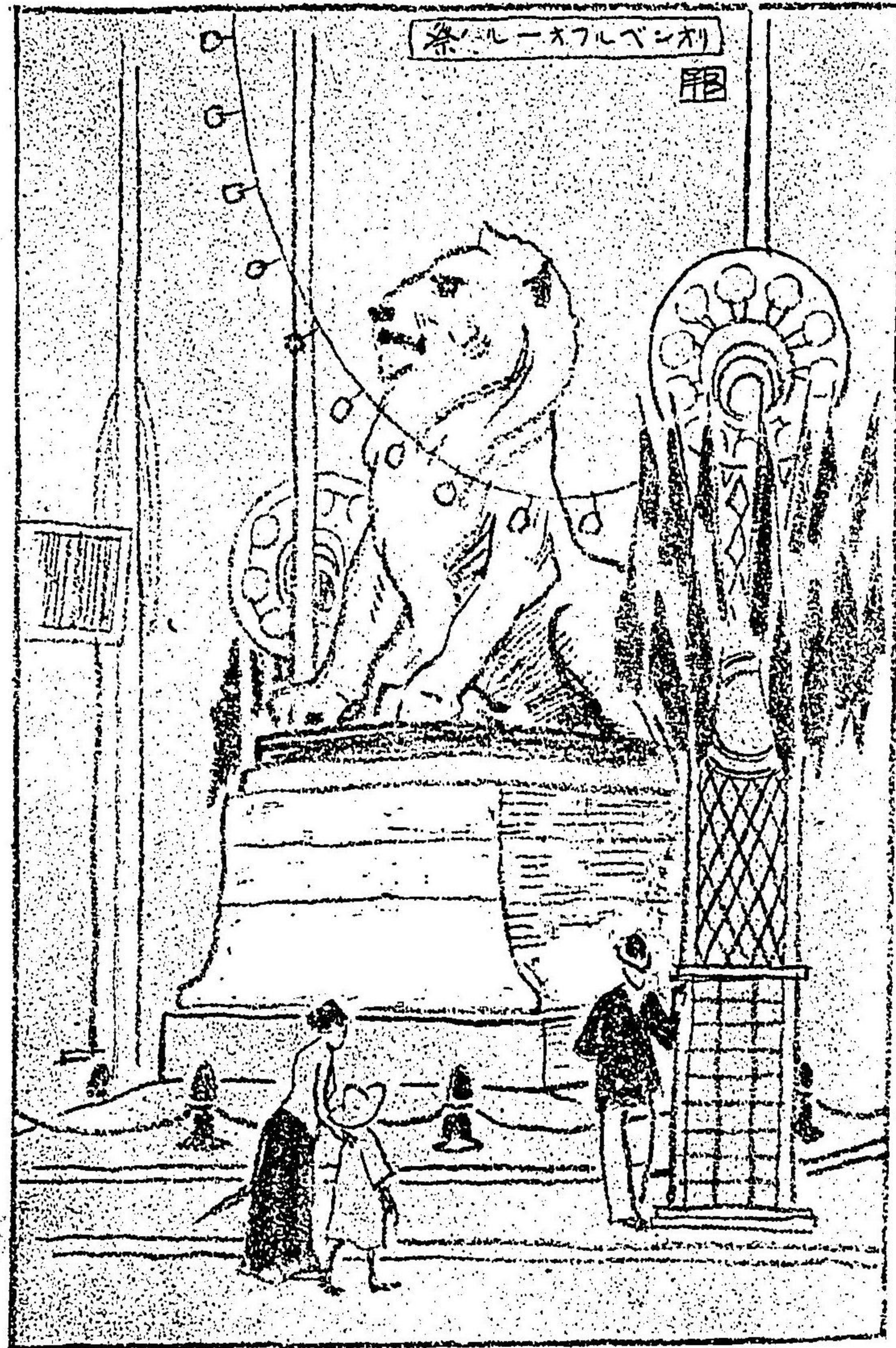
廣告人





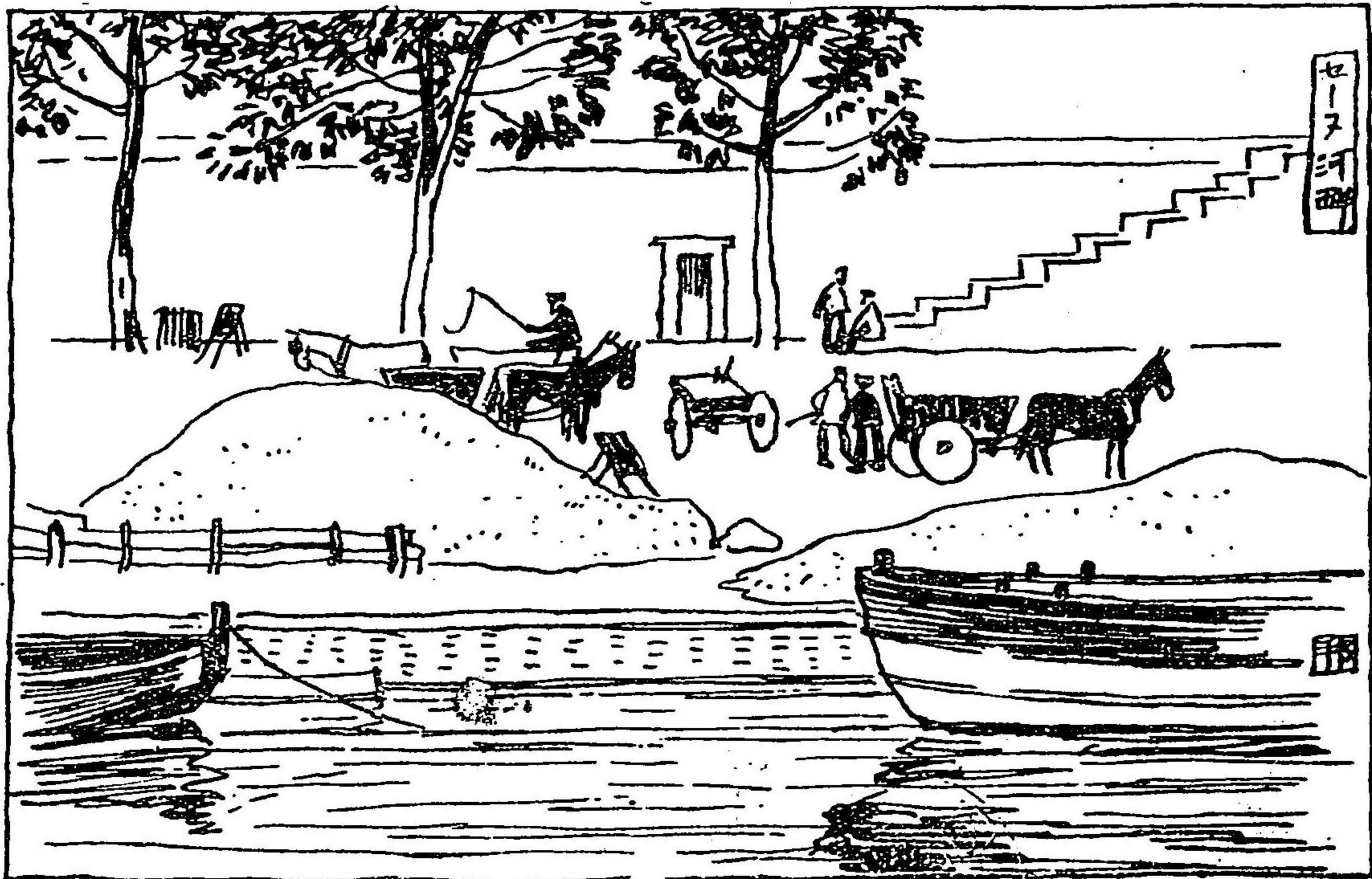








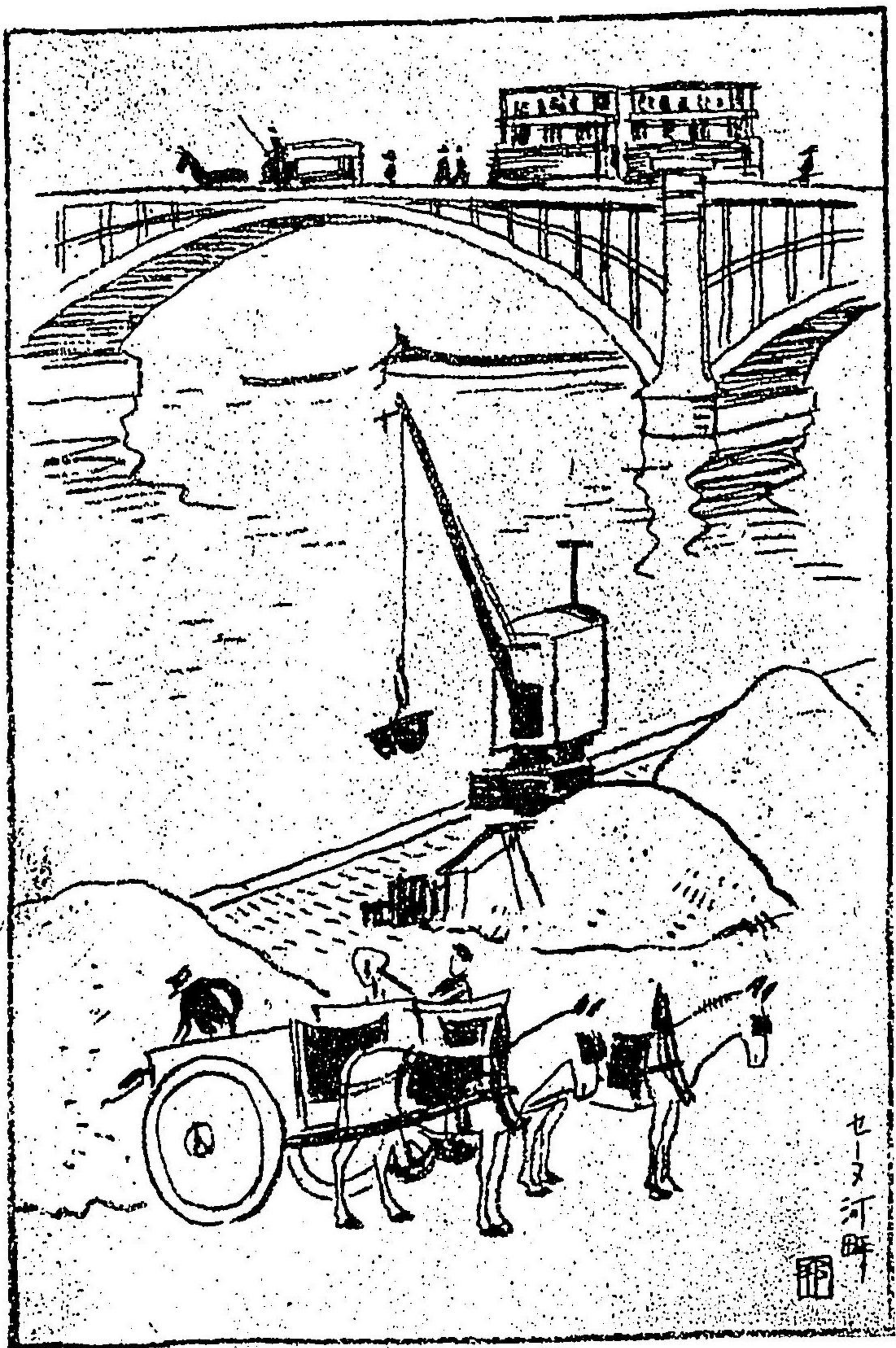






花市
昭和二年





セー河野
印



乙一河甲一

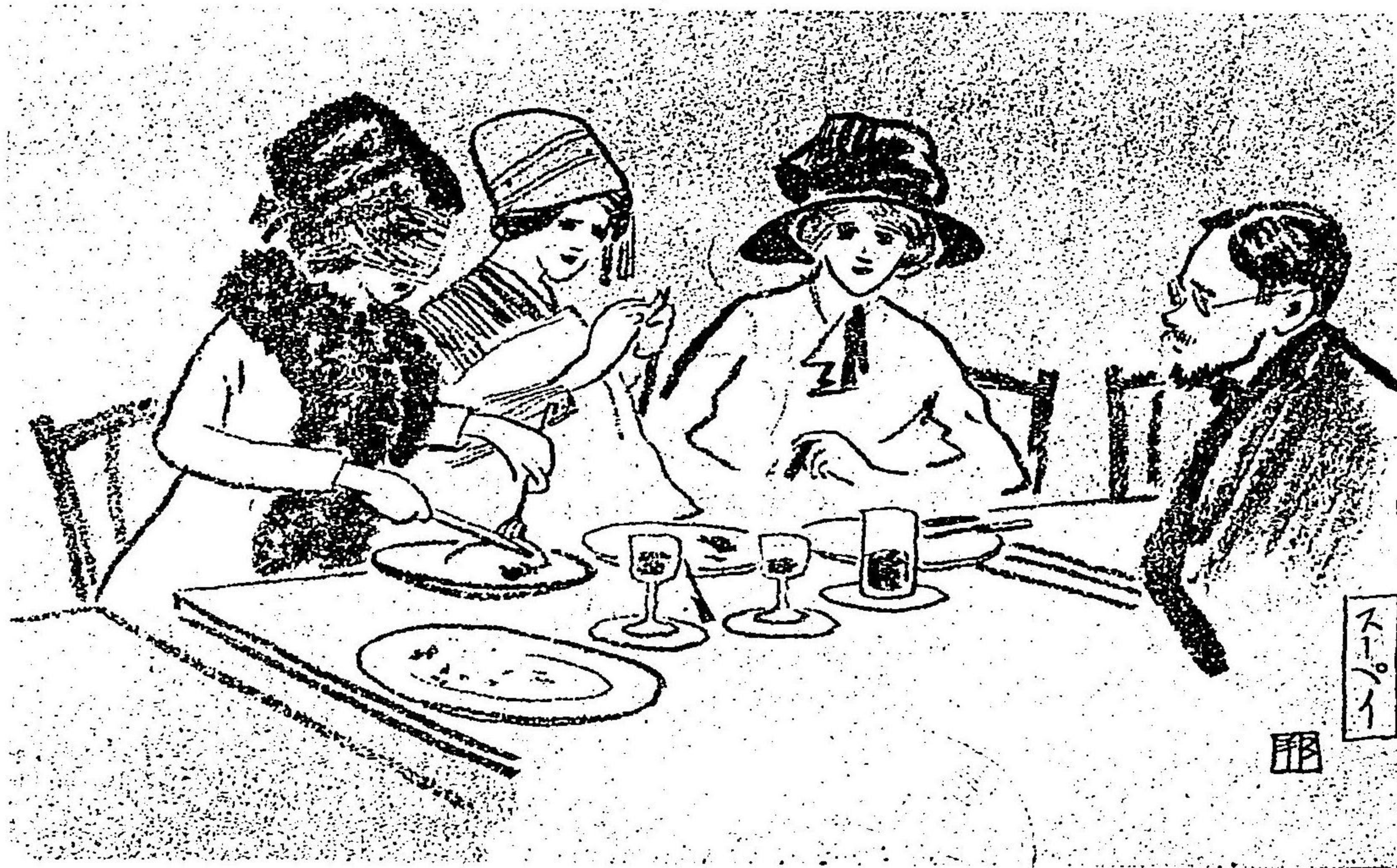


巴里名物肥子作人





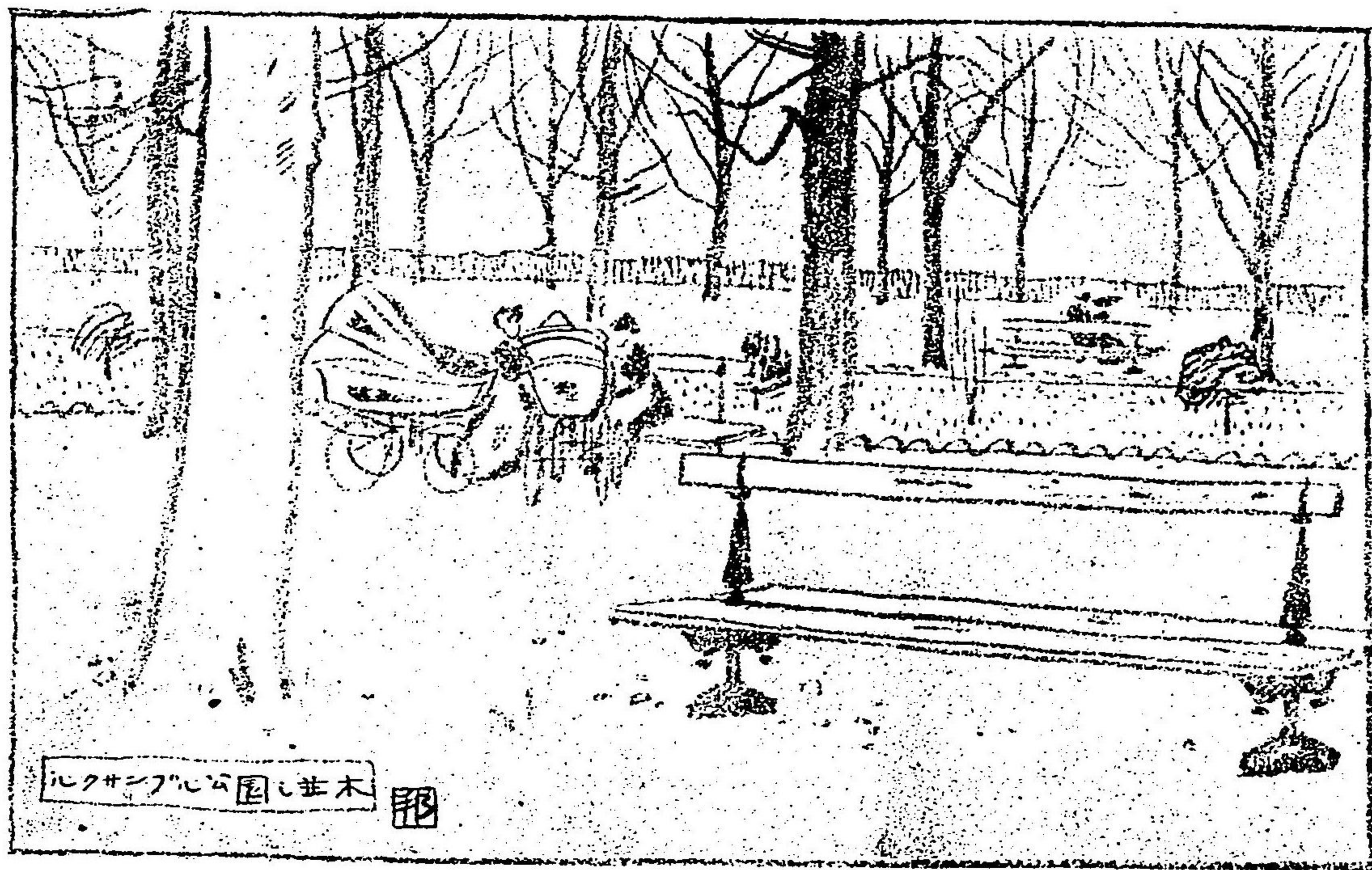
肥と瘦と人
田





市翽

1



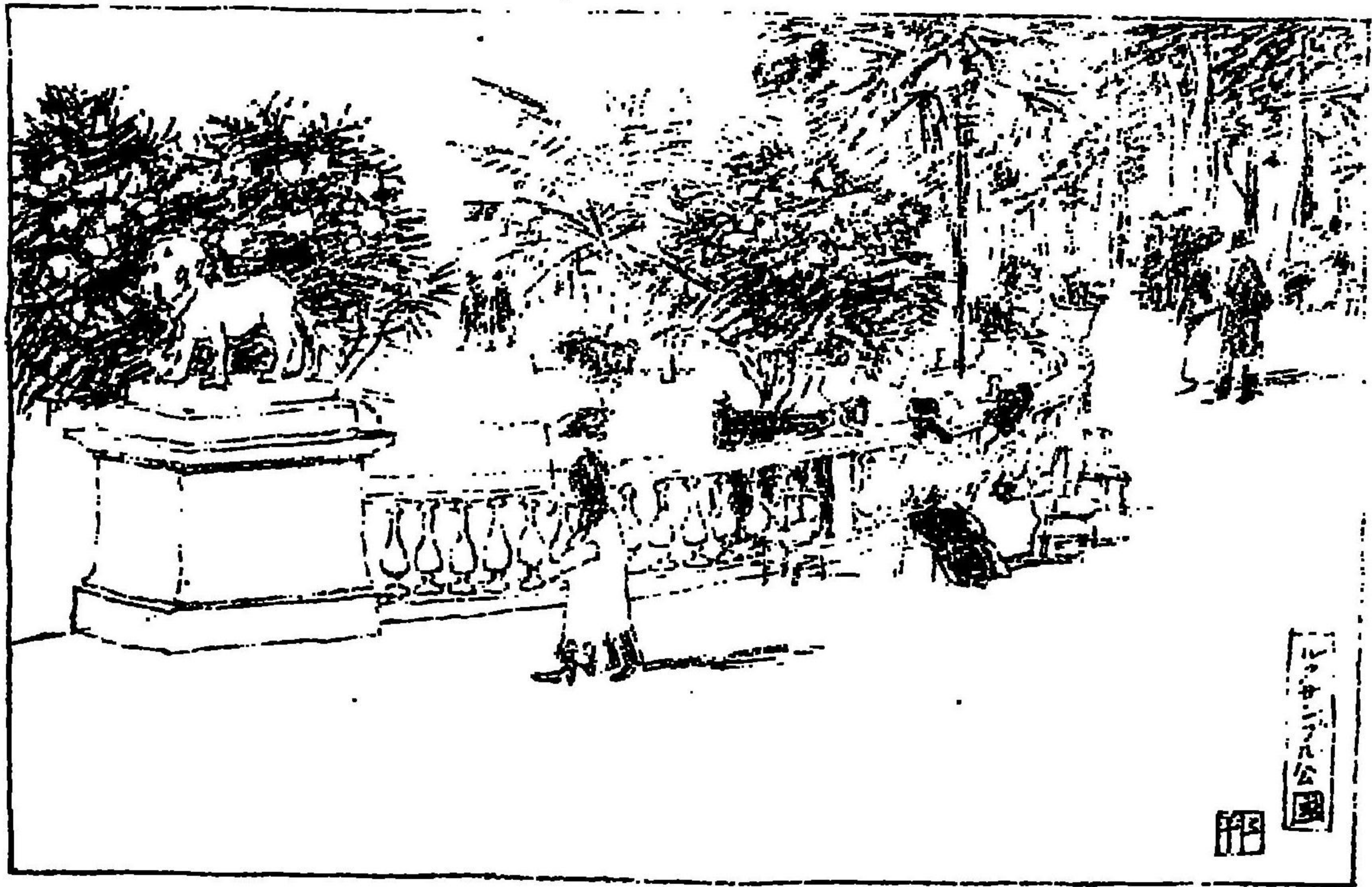
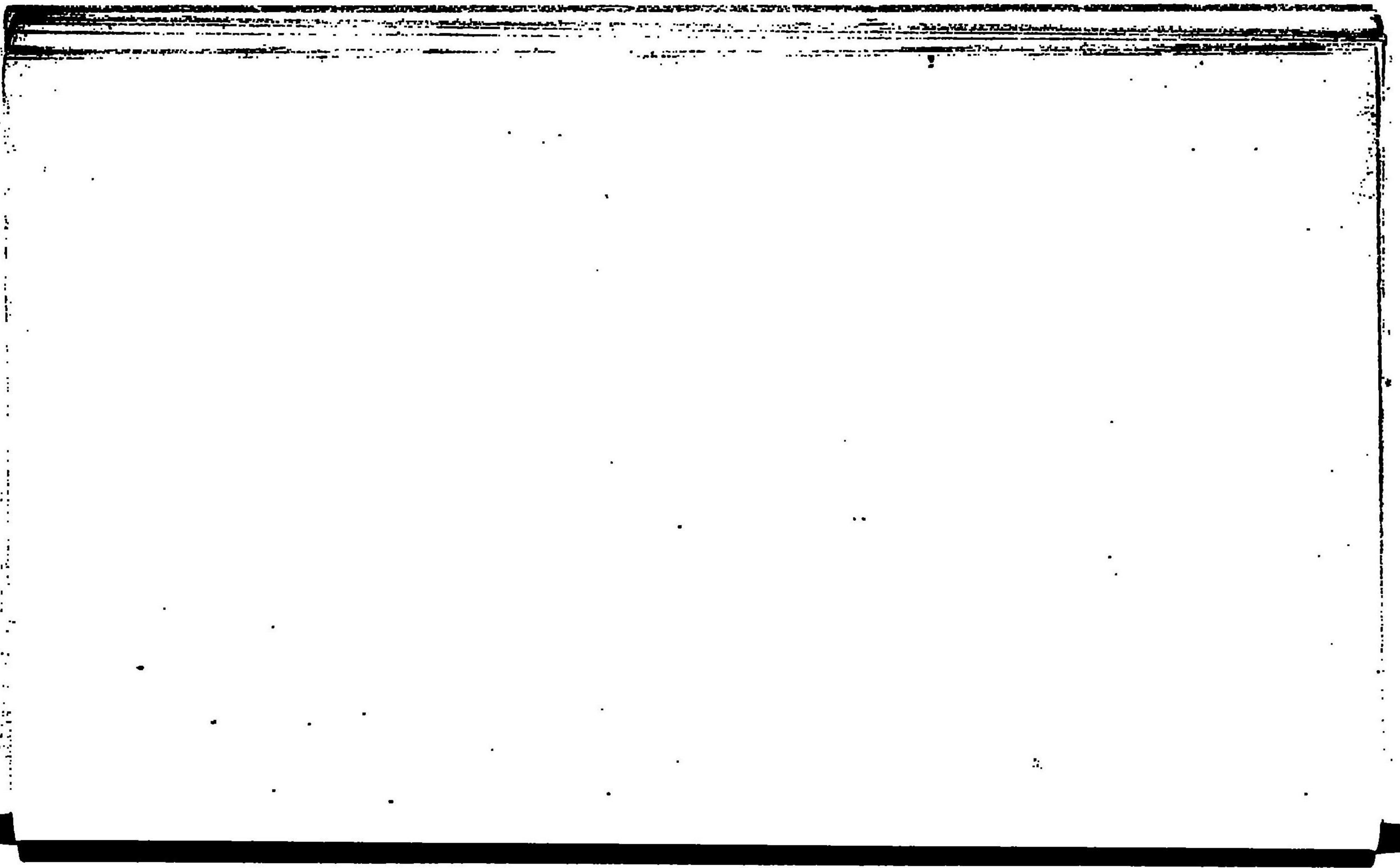




帽子
印



三ノ市







巴里繪日記

目次

横濱出帆	……	一
京へ	……	二
神戸出帆	……	三
長き航海の途に上る	……	四
上海着	……	五
香港へ	……	九
南へ南へ	……	一〇
ケープルカー	……	二
黒人と腰巻	……	三

(11)

ベナン	………	114
熱帯の涼氣	………	112
老紳士	………	118
静かな海	………	115
スエズ運河	………	111
ボートサイド所見	………	114
鰻の御馳走	………	110
巴里着	………	111
初めてサロンを見る	………	112
巴里の寄席	………	116
六階上の住居	………	113
ルーブル	………	111
クロツキー	………	112

動植物園	………	119
五月雨の巴里	………	117
里芋の葉	………	118
巴里の風呂	………	115
葬式へ	………	116
コラン先生	………	110
セーヌ河の釣り	………	113
電線電柱	………	117
共同便所	………	116
巴里名物	………	117
貸書室	………	111
書室生活	………	112
模範的書室	………	113

(11)

(8)

負惜み	………	七六
モデルの市	………	八一
廣告繪	………	八四
カツヘーモニコ	………	八五
異色ある展覽會	………	八九
極單な流行	………	九一
巴里と那翁	………	九三
美術學校附近	………	九六
アカデミージュリアン	………	一〇一
小踊子	………	一〇四
古寫眞版	………	一〇七
踊子	………	一〇八
米國人	………	一〇九

如才ない女	………	一一一
カツヘーにて除夜	………	一一三
繪畫と年號	………	一一三
オペラ	………	一一六
寫生と見物人	………	一二〇
公園と住宅	………	一二三
祭りの日	………	一二六
活き活きしたモデル	………	一二七
石油とアルコールと	………	一二八
無言の廣告	………	一三〇
美術學校の火事	………	一三六
文明と鏡	………	一四〇
繪畫より羊	………	一四二

(9)

(*)

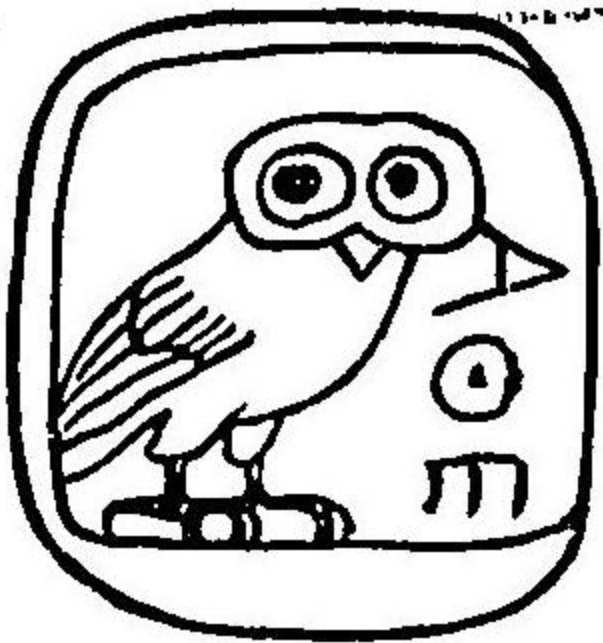
巴里よりロンドンへ	………	一四三
巴里のモデル	………	一四三
コンコルド	………	一四三
ノートルダム	………	一三七
巴里と廣告	………	一五〇

—(目次終)—

巴里繪日記

橋本邦助著

横濱出帆



四月廿七日

正十二時の號砲を合圖に船は靜かに波止場を離れた。始終往き來をしてた人々と、しばらくの間もう會はれないのだなと思ふと、急に寂しい感が襲つて來る。私は人々の振る半けちや帽子が見えなくなる迄船舷に立つて見てゐた。

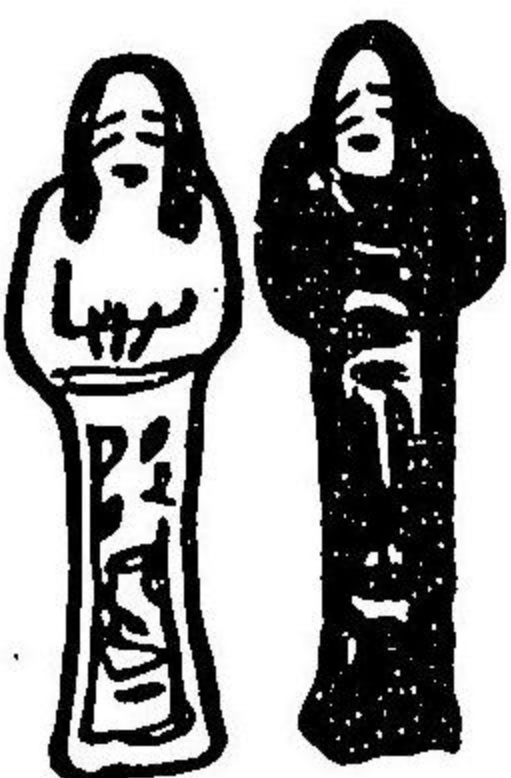
船は大島の極く近くを通る。一昨年の冬和田と一所にそこに遊びに來たので、其時知り合ひになつた人々の事を想ひ出して懐かしかつ

(一)

た。
日没時の紅の空の中に紫色をなした富士がすつくと立つてゐるのが雄々しい。やがて天も海も蒼ざめて來ると大島の麓に當つて、灯が一つ二つ見える。

四月廿九日

京へ
大阪の野田九浦と京都へ行く。祇園清水のあたりいつ見ても好い。六時頃都おどりを見に行く。一等席を奮發して、美妓の立てた薄茶に舌鼓を打つ。それが濟びと舞臺が開いて、人形の様な舞妓が扇をかざし、東西の花道で向ひ合つてゆるやかに踊る。京極の賑はひを見て、大阪の野田の家へ歸り、夜遅く迄話す。



四月三十日

神戸出帆
船は午前十一時に神戸を出帆した。茲で大分乗客が増したので、船中急に賑かになつた。西洋人が子供を連れて、甲板上を運動してゐるのが如何にも輕快だ。



四十位の商人體の印度人が三度三度私と隣つて食卓に就くことになつた。日本語が達者で色々なことを話し懸ける。船は靜かな瀬戸内海を走るので些の動搖もなくまるで疊の上にある様だ。のんびりした形の大小の島が、いくつもいくつも見え隠れして、一大盆石を見る様に思はれる。

五月一日

長き航海
の途に上
る



朝食後、食堂で新聞の挿畫二葉大急ぎで畫く。巴里の友人への土産もの、つもりでギスケ養を澤山買ひ込む。

此の附近の壇之浦は源平の古戰場、當年赤い旗と白い旗とが青い静かな此の海で入り亂れて戦つた状は、奇觀此上もなかつたことだらうなど思ふて、平家蟹の繪葉書を東京の友に送る。十二時に船は愈々下の關を離れて、長き航海の途に上る。

五月四日

上海着



目が醒めて窓から外を見ると、海は一帶に黄土色をなしてゐる。船は今揚子江に這入つてゐるのである。門司より二晝夜も、風強く浪高く、船暈に悩まされた乗客も、波隠かなる河口を進むのと、上海に近づきつゝある喜びとで、皆元氣ついて來た。昨日の食堂は甚だ寂しかつたが、今朝はうつて變つて賑やかで、飯もうまかつた。斜に綱を通し、横に竹を渡した、黒赫色の帆をあげた舟が、時々私等の船とすれすれに通る。

右手に三角州が見えて來た。左には遙かに揚子江の岸が見える。甲板上に並み居る人の顔は精彩を帶び、望遠鏡は手から手に渡される。三角州を過ぎてより、揚子江の口は急に狭くなつた。草の緑り楊柳の茂り、其間に點々してゐる白い家、赤い屋根もはつきり見えて來た。帆を

張つた黒い船がいくらも通る。

吳松港の傍を過ぎた頃は丁度晝飯時分だつた。

船が上海に碇を下したのは二時半頃で、人々は上陸すべく争つてランヂに飛び移つた——船は揚子江の真中にあるので——私等六人の伴れは案内者もなく唯ふらふら出掛けた。そして愚園へ往つて見やうと云ふことになつて、電車に乗つた。が此の電車が愚園へ往くか往かぬかは、初めから知らないで、それを聞く爲めにN氏が英語で車掌に尋ねたが通じないで、愚園と云ふ字を書いて見せたら頷いたので、やつと腰を下した。切符を買ふ段になつて亦困つた。が今度は手眞似で済ませた。電車は海岸通りより左にそれて、雑踏すること上海第一と云はるゝ南京街を通る。

道は中央が車道、兩側が人道と別たれてある。工合は、銀座あたりと少しも違はぬ。が赤い漆や金で塗つた佛壇の様な家の多いのには、奇異な

(六)



上の海町の

思ひをした。軒先きに看板を多く掛け連ねてあるのも、茲の特色の一つであらう。四つ辻には英租界で備つてゐる赤い布で頭を巻いた偉大な印度巡査が立つて、手を揚げたり下げたりして、頻繁な車馬の通行を指揮してゐる。南京街の盡きんとする所に、歐米人の經營してゐる競馬場がある。今日は丁度其競馬のある日とて、其附近は非常な人出である。電車の内から競馬場がよく見渡される。今しも驅けり來る數頭の馬は、電車のす

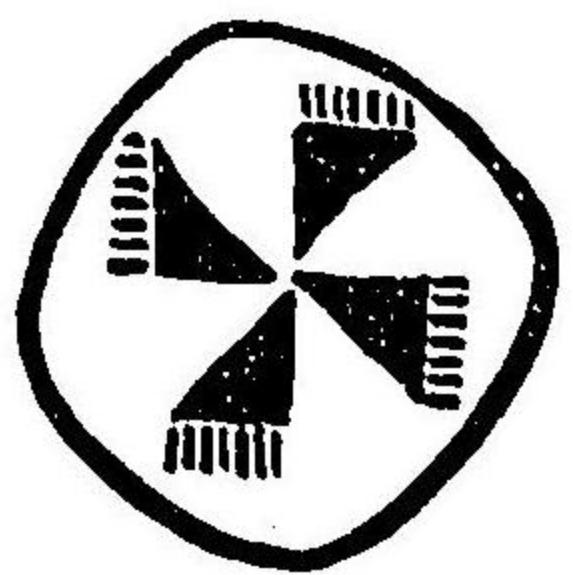
(七)

ぐ近くを過ぎむとするので我等は車内より大聲あげて聲援した。
 愚園は公園と云ふよりは一の庭園である。門を入ると右側に入場料
 を拂ふ所がある。更に門を入つて右すれば、すぐ池に臨む廻廊に出
 る。池の汀は支那特有の所々に丸い穴のある石で透間もなく飾られ
 てあつて、楊柳や芭蕉が其間に配せられ新緑の香が漂つてゐる。古雅
 な欄干の廻れる白壁の一の樓臺が、池中に浮むでゐる。樓は所々に窓
 が明けられてはあつたが、内部は甚だ暗い。床は瓦で種々の模様が見
 されてゐる。其一段高い所に三人の樂師がゐて、沈むだ樂を奏してゐ
 る。其前に澤山の椅子やテーブルが置かれてあつて、人々はそこで静
 かに樂を聞き茶を喫してゐるのである。我等はそこに向ひ側の茶館
 に休むだ。

梧桐や、芭蕉や、楊柳や、水竹をあしらつた南畫の謝亭、岩に倚り、水に臨む
 だ北宗畫の樓臺、繪を見る毎に幾度か憧憬れてゐた其樓の内に、私は今
 現に、黒檀の椅子に腰を下して、同じテーブルの上の支那料理を喫し、支
 那茶をすゝつてゐる。私は畫中の人となつてゐるのである。向ひより
 來る樂の音は、新緑の香と共にこゝろよい。耳に飾りの環をつけ、目の
 邊を淡紅に染めた乙女が、黄や、紫の衣を着て、二人、三人、我等の室を覗き
 ながら通る。私は何だか現代を離れて、遠い遠い時代に生きてゐる様
 な氣になつた。

五月六日

香港へ



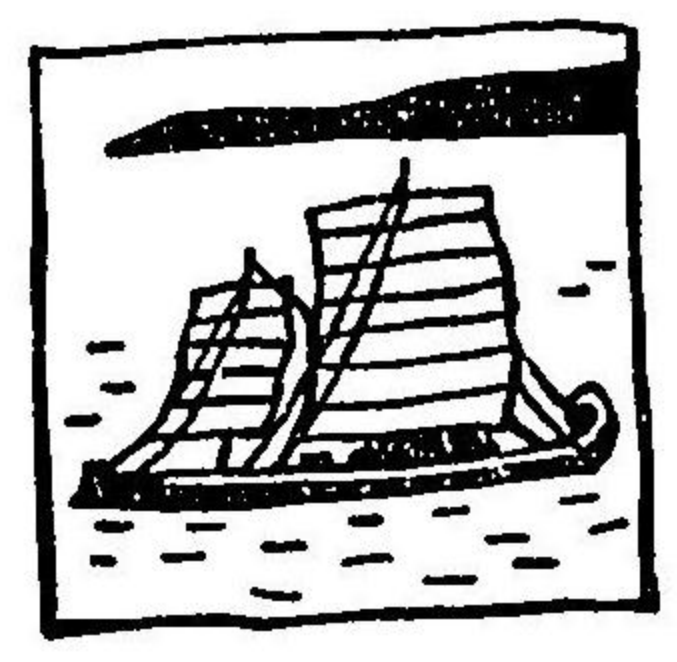
午前八時半船は拔錨して香港に向ふ。

上海を出て數十哩の間尙ほ黄波滔々として、轉た揚

子江の大を思はざるを得ない。

夕方になつて島影左右に現はる。

南へ南へ



本日より暑氣俄かに加はる。上海より船は一直線に南へ南へと進みて、熱帯圏へ入つたからであらう。

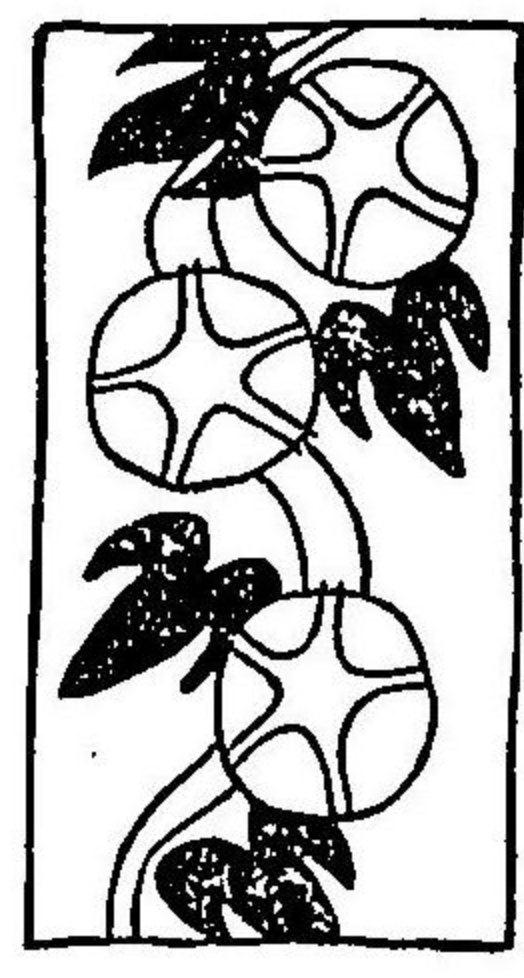
五月七日

甲版にタオルや、ナフキンや、ズボン下の洗濯物が干され、それに日光が直射して目まぐるしい。

夜、今迄同じ卓で飯を食つてた支那人が、明日香港で下りると云ふので、其送別會を食堂で開いた。白人が時々ビールやらウエスキートを飲みに来るが、こそこそ行つてしまふ、黄色人同士の會飲に遠慮してゐるのであらう。

五月九日

ケーブルカー



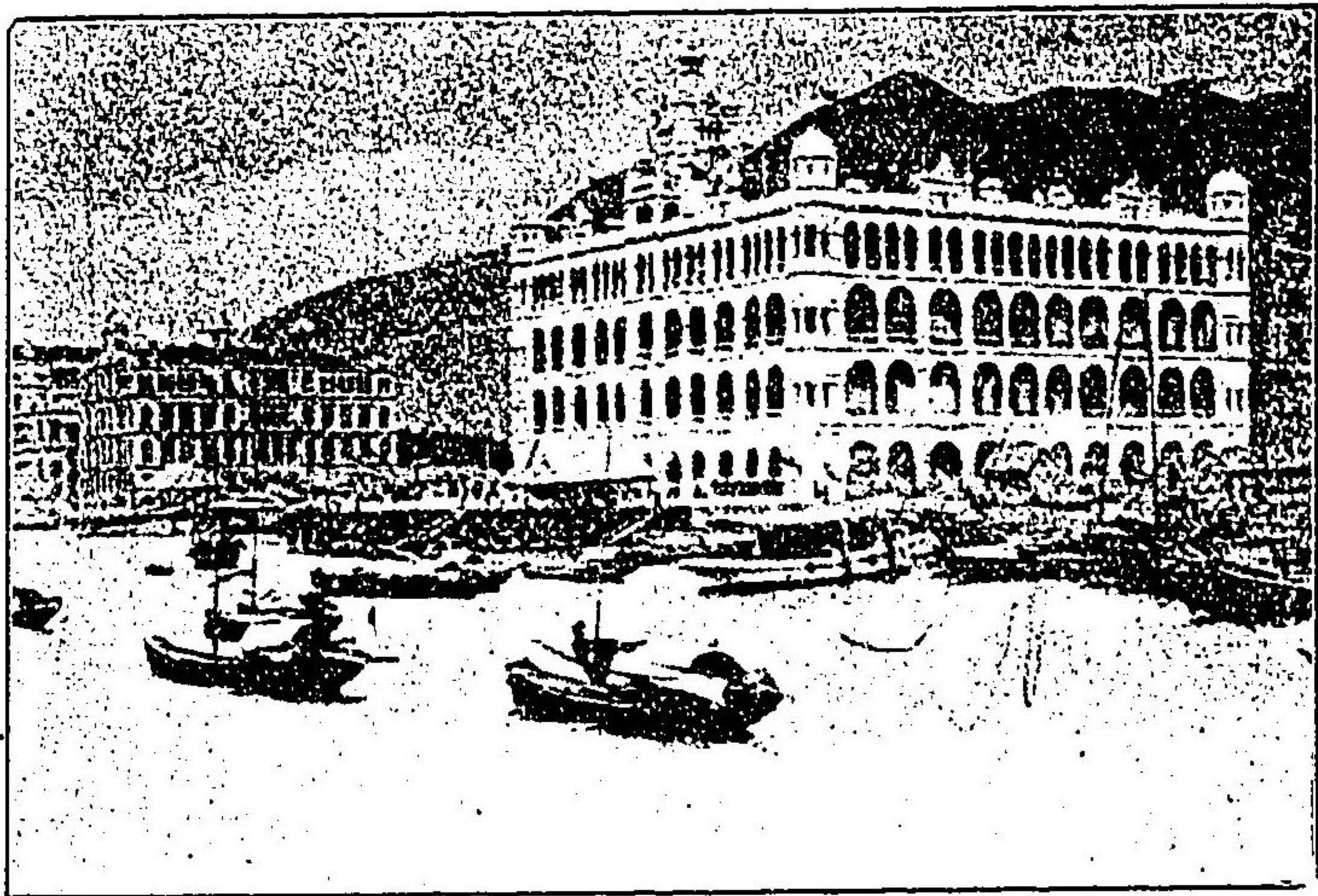
香港へ着いた。

茲を過ぎる旅行者の多くが、一度は必ず乗つて見ると云ふケーブルカーへ、自分も乗つて見た。

停車場より少しの平地もなく、車はすぐに坂を登る。

日本にては、七八月頃でなければ見られぬ朝顔の様な花が道端に晝日中咲いてたり、椰子の木がすつくと立つてたり、棕櫚が一面に生ひ茂つてたりするので、自分は今、熱帯に居るのだと云ふことを、しみじみ感ずる。

車は時々、藪や、暗い木の茂りの間を抜けて、明るい崖に添ふて走る。すると車掌は、僅かではあるが車の進行を止める。其間乗客は展望を恣にする事が出来るのである。



香 港 の 港

(三)
 濃き緑色の山の麓に、種々な色彩をなせる香港の市街が白日に照らされて、きら／＼光つてるのが目の下に見える。對岸の支那大陸が青壘を展べた様な静かな灣の向ふに、近く横はつてる。灣の内には無数の舟が、唯もう雑然としてちらばつてゐる。長さ七十間もある汽船が豆つぶ位にしか見えない。それが煙を吐いてゐるなどは甚だ滑稽である。
 車が最も急坂を登るときには、

體は殆ど横になつてゐるので、自分の前に腰掛けてゐる西洋婦人の、大きな帽子が、今にも自分の顔に落ちて來そうだ。いや落ちて來ると云へば、若しも車を支へてる鐵條が、何かの故障で切れたらどうなるだらう。シガーをふかしてゐる鼻の高い男も、白い服を着て、赤い洋傘を持つた女も、油臭き辨髮の人も、車と共に千尋の崖下に落ちて、微塵に打ち碎かれるであらう。そう思ふとぞつととして冷汗が出る。

五月十六日

黑人と腰巻と



日本の下女の御さがりを頂戴して來たのかと思はるゝ様な、色の褪た



園公のルーボガンシ

(15)

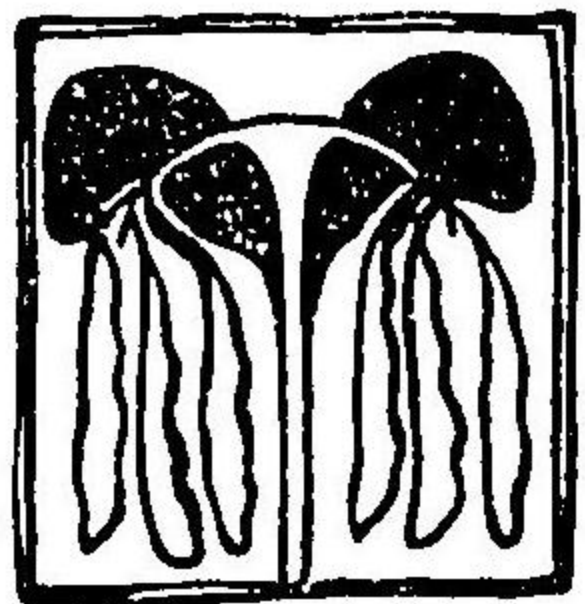
赤い布を纏て得意がつてるのもある。
鉢巻も白腰巻も白のやつは、それが特に目に立つて、洗濯屋の廣告か看板には持てこいであると思はれる或は青い縦縞のもの、或は赤の粗い格子縞のもの、或は單に黄なるもの、或は草花や鳥獸の模様のあるもの、或は細かな唐草模様のあるもの、それら百人百色の布を纏つたものが、づらりと棧橋の欄干に凭たれてゐるのを、ランチの上

から見上ぐると、そこに腰巻陳列會が催はされたかの様だ。

五月二十日

彼南に着いた今夜は甚だ静かな夜である。

空は曇つてはゐるが、月があるので、海も空も銀鼠色をなして薄明い。

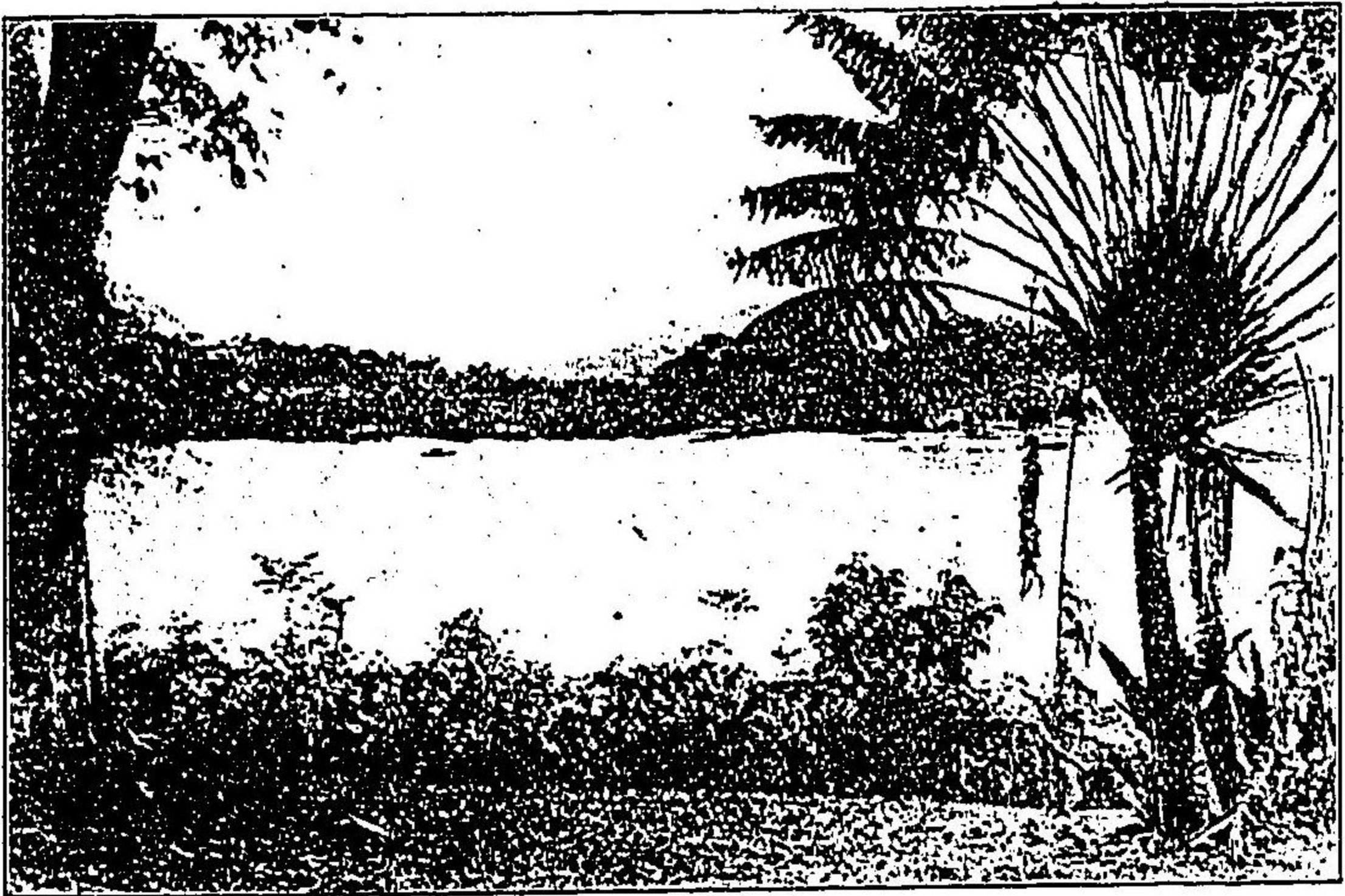


船の周圍に二挺艇を操つてサンバン、サンバンと異様な聲で、黒人が呼ばつてゐる。

私は甲板へ出て静かな海に對しながら色々なことを考へてゐた。と、浴衣を着た二人の女と白服姿の水夫とを載せたサンバンが、船梯子の下を離れて夢の様な左舷より、彼南の町の灯が華やかにもつてる、右舷の方へ廻つて行くのを見た。

今日茲へ伊豫丸の着くのを知つて、二人の女は、各馴染の水夫を迎ひ

(16)



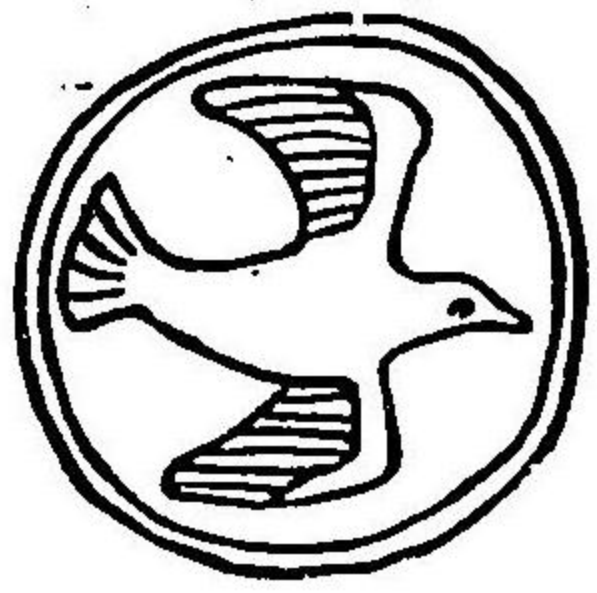
(一六)

に來て、香料の香高き自分の室
で積る話に一夜を過ごそうと
するのである。
降つても照つても空と海とよ
りしか目に入らない、船の中で
眞黒になつて同じ様な仕事を
日に日に續けてゆく水夫と、甘
言に誑されて、千里の外に密航
して來て、心にもなき醜業に身
を墜して、憐れな女とを載せ
た舟が、町の灯の華やかにとも
つてる方へと、ずんずん進むで
行く。

今宵は水夫長の小言より逃れて、優しき言葉情ある話に、心も柔らくこ
とであらう。白人と黒人と、支那人とを相手に、身を切る如き務めをし
て、肉も腐れ心も荒みたる女も、故國の人、其人は無邪氣で且つ勇敢な水
夫に對つては、心から親しみ語るのを禁じ得ぬであらう。斯くて水夫
は亦、長き單調な航海にも元氣が出やうし、女は亦來む時の會瀬を樂し
みに、其日其日の苦も打ち忘るゝであらう。
さらば今宵は、彼等の上に幸あれよと、舟を見送りながら、獨り心に祚る。

六月五日

熱帯の涼
氣



朝五時半にペットを飛び出して、まだ水の乾かぬ、
洗ひ立ての甲板の上を、洗足でひたひた歩く。
海は静かだし、風は涼しいし、太陽の上るのも見ら
れて、心地すがすがしい。船は十一時半頃、紅海の狭い口を通過する。

(一七)

紅海の蒸す様な熱さには、旅人が最も閉口すると云ふことを聞ひてゐたが、一向そんな様子もないので、却つて張り合ひがない。朝から夕方迄に、本船より先きに行く汽船を三杯抜いた、非常に氣持の好いものだ。これがあべこべに驅け抜かれてゆかれるときつと不快なものだらうと思ふ。鷗の様な鳥が船に伴れて飛び行く。

六月七日

老紳士

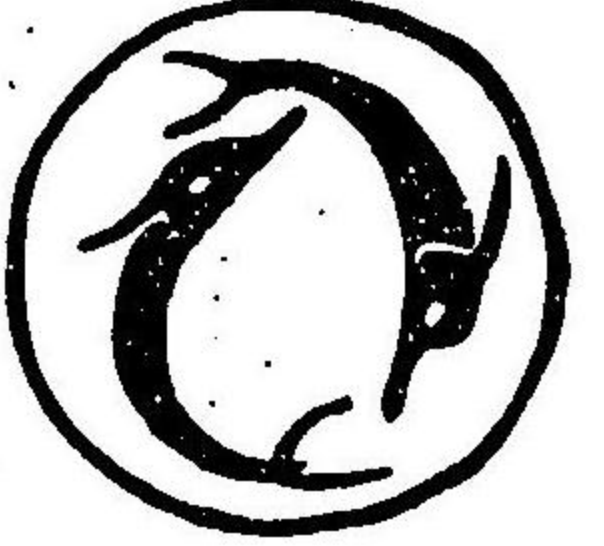


昨夜は涼しい風が室の中へ吹つ込むで来て、何とも云へぬ好い寝心地だつた。朝は早く起きて、相變らず甲板を洗足で歩く。午後食堂で話してゐたら、英國の老紳士がやつて来て、加藤ドクトルに見供が食事の時騒々しいがそれを止める藥

はないかと笑ひく話掛ける。此老人どことなくゆつたりしてゐて、酒を飲めば大にはしやぎ出す面白い氣質の人だ。顔の深い皺と目尻の下つた點が氣に入つたから、鉛筆で肖像を書いてやつたら喜むでゐた。そこへやつて来た露國人が、僕に歳は十七かと聞くから廿七だと云ふたら、彼は怪訝な顔してそれにしては小さいと手眞似で變なことをしてる。僕より大きい和田が、巴里で小供あつかひにされてるそうだから、僕が十七位に見られるのも無理のないことだ。

六月八日

静かな海



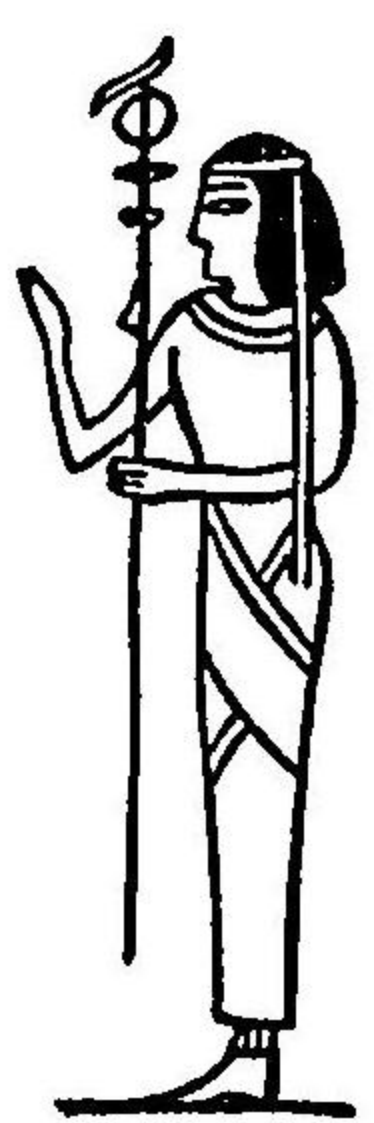
今日は風も弱く、海も静かだ。船は北へくと進むで行くので、氣候は涼しくなるばかりだ。機關長の話によれば、紅海へ這入つたら蒸し熱くつて、とてもベットになぞ寝られないから、其時はみんな甲板へ寝るの

だそうだが、今度の航海はどう云ふ風の吹き廻しか、更に寝苦しい日に
 一晚も遇はなかつた。僕等は實に幸福な時に出會したのを喜むである。
 正午頃は、太陽が丁度頭の真上へ來てるので、影が足許へ少さく集まつ
 てしまう。だから三尺離れて歩かないでも影を踏む心配はない。
 午後斬髮して貰ふ。理髮師はボーイ兼帯で、何でも早くやれ主義だか
 らたまらない。二十分位で刈つた跡には虎斑が残り、剃つた鬚の跡は
 ざら／＼する。頭を洗ひもしなければ、油や香水など無論振り掛ける
 ことはしない。それで一回の理髮料五十錢とは、中々好い實入りであ
 る。

今日も甲板に夏服だの、シャツだの、ズボン下だの、浴衣だの、半ケチだの、
 靴下だの、洗濯物が一面に干し列べてある。膚に付けられてない時の
 皴の寄つた着物はきたならしいものだ。
 夕食後甲板に出た時には、丁度太陽が黄な色を上方に漂はせて鼠色の

雲の中に、あか／＼と地平線近く落ち行く時であつた。
 浪が少しも立たないので、まるで瀬戸内海を行く様だ。穏やかな海、眠
 つてる様な海、其内を黒煙を揚げて走つて行く船の跡が、黒く長く海に
 残つてる。それが如何にも大事な塗物か、何かに、傷を付ける様に思は
 れて、無残である。

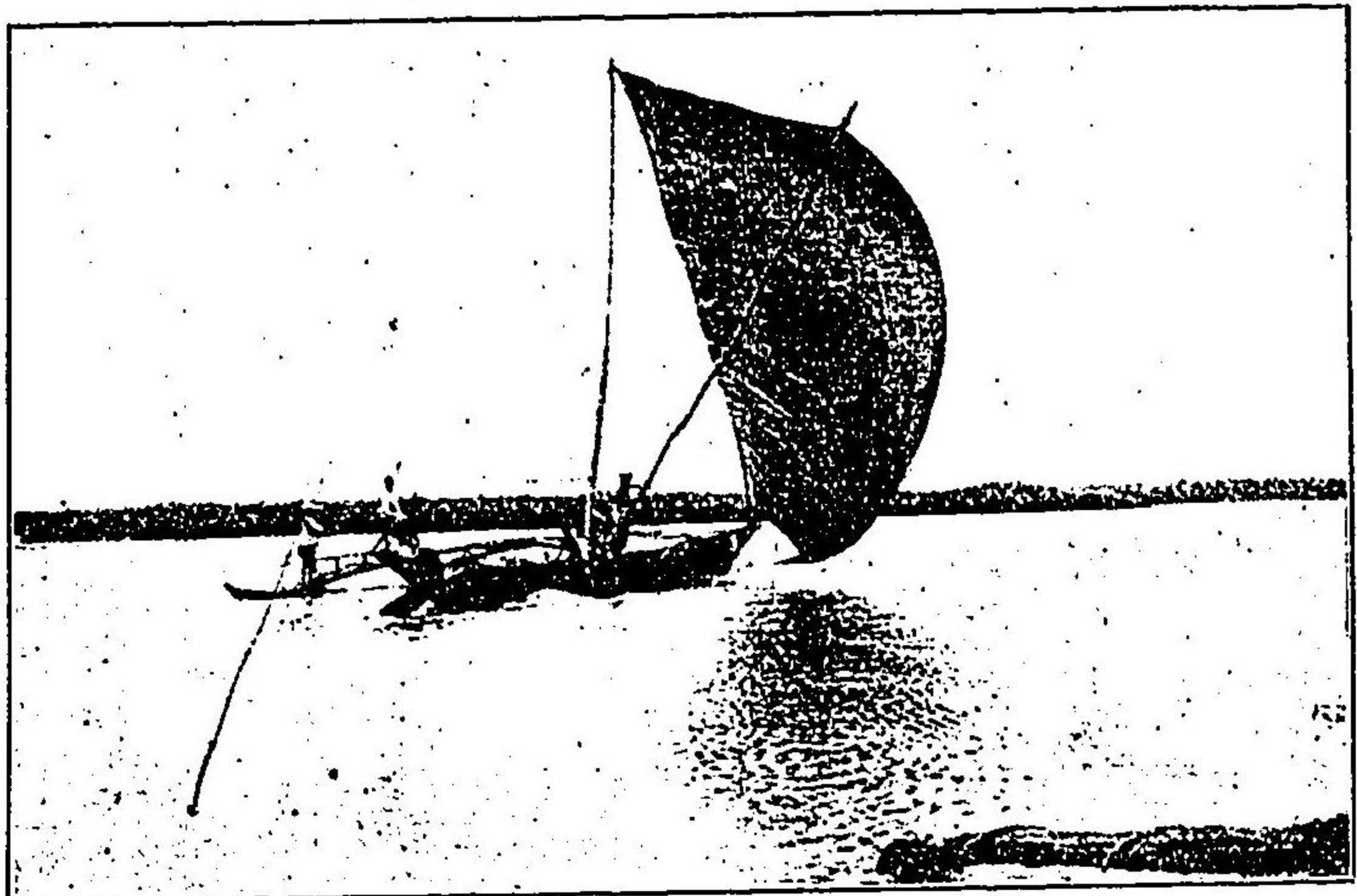
スエズ
 河



六月九日

自分が今朝起き出た時には、船はスエズ
 灣を進航しつゝあつた。

船に近く右にも左にも砂山が見える。コロンボを出てより十二日間と
 云ふもの、唯海と空とばかりで——紅海の入口で一寸陸を見たが——海上
 に鳥が飛ぶでると云つては珍らしが、海豚が見えると云つては目を
 丸くした人々には、非常に楽しく思はれた。望遠鏡を取つて見ると、黒



近 附 ズ エ ス

(三)
つばい岩と、赤黄いろい砂ばかり草木は更がない。焼砂が日光を反射してぎら／＼光つてゐる爲めに眩しくつて長い間見てゐられない。晝飯に食堂へ入つた時には、一時總てのものが暗くつて、何が何だかさっぱりわからなかつた。
船がフェズへ着くと、陸から三角形の帆を張つた小舟がいくつも、いくつもやつて来る。そして帆柱から舟舷へ結び付けた細梯子を傳はつて本船に乗

り移り種々な土産物を賣りに来る。中々高價に吹つ掛けるが半値位にはまける。けしからぬ寫眞を持つて、ちらと見せて、買はぬかと勧める。それを賣つてしまふと、また小舟から一ダース位持つて来る。彼等は決して一度に澤山持つて来ないのだ。彼等は時によると、没收されるもののあるのを懸念してゐる者らしい。茲からパイロットが乗つた。愈々有名なスエズの運河に入るのだ。

運河の廣さは約四十間位ある。土手の毀れぬ様に、コンクリートで固めた處や、石を積み上げた處もあるが、大部分は掘りつ放しの處が多い。ある處には蘆を植え付けたり、植林をしたりして土手の崩れるのを防いでゐる。元來此邊は年中殆ど雨の降らない處なのだから、植林事業は非常に困難なことなので。其困難なことを敢てして、しかも、多少にても好結果を得つゝある運河會社の努力は、實に嘆賞すべきである。此の運河を境にして右はアラビヤ、左はアフリカの沙漠が無限に連な

つてる。時々ラクダを運れた黒人が土手を通るのを見てにつけて、小學校に居る時分教はつた隊商のことを思ひ出して言ひしれず懐かしく思つた。

何しろ狭い運河のことであるから船と船が通り過ぎる時には、どちらか一方片寄り止まつて、他船の通行を待たねばならぬ。三艘も四艘も待たせて置いて、悠々として過ぎ行く時には何だかこう殿様にでもなつた様な氣だ。自分の船が三十分も一時間も同じ處にちつと待たねばならぬ時には、錨を上げたり下したり、其度毎に車の音が「ら〜」頭に響いていやなものだ。

夜は探海燈で行く手を照しながら通る。

六月十日

ポトサイド所見



船がポトサイドに着いたと云ふのでN氏が朝早く起こしに来る。今日は晝頃に着く豫定だつたのが、昨日運河で船を待ち合せたことが

案外に少なかつた爲めか、午前五時には早くも着いたのである。

茲へは唯單に石炭を搭載する爲めに五時間許り碇泊するのである。其石炭は英炭で粉末になつてから積み込むときにそれが四散して船が眞つ黒になつてしまう。だから船にはとても居られたものでない、其間は是非其陸へ上らなければならぬのだ。其でなくつても陸上戀しき時だから、起る勿々上陸の支度をする。いつも八時の朝飯が今朝は六時に始まつた。船では早く客を上陸せしめて置いて室内へ石炭粉の進入せぬ様それ〴〵手配をするのだ。

船から陸迄の距離が隅田川より狭いそれでサンパン料一人前六ペ

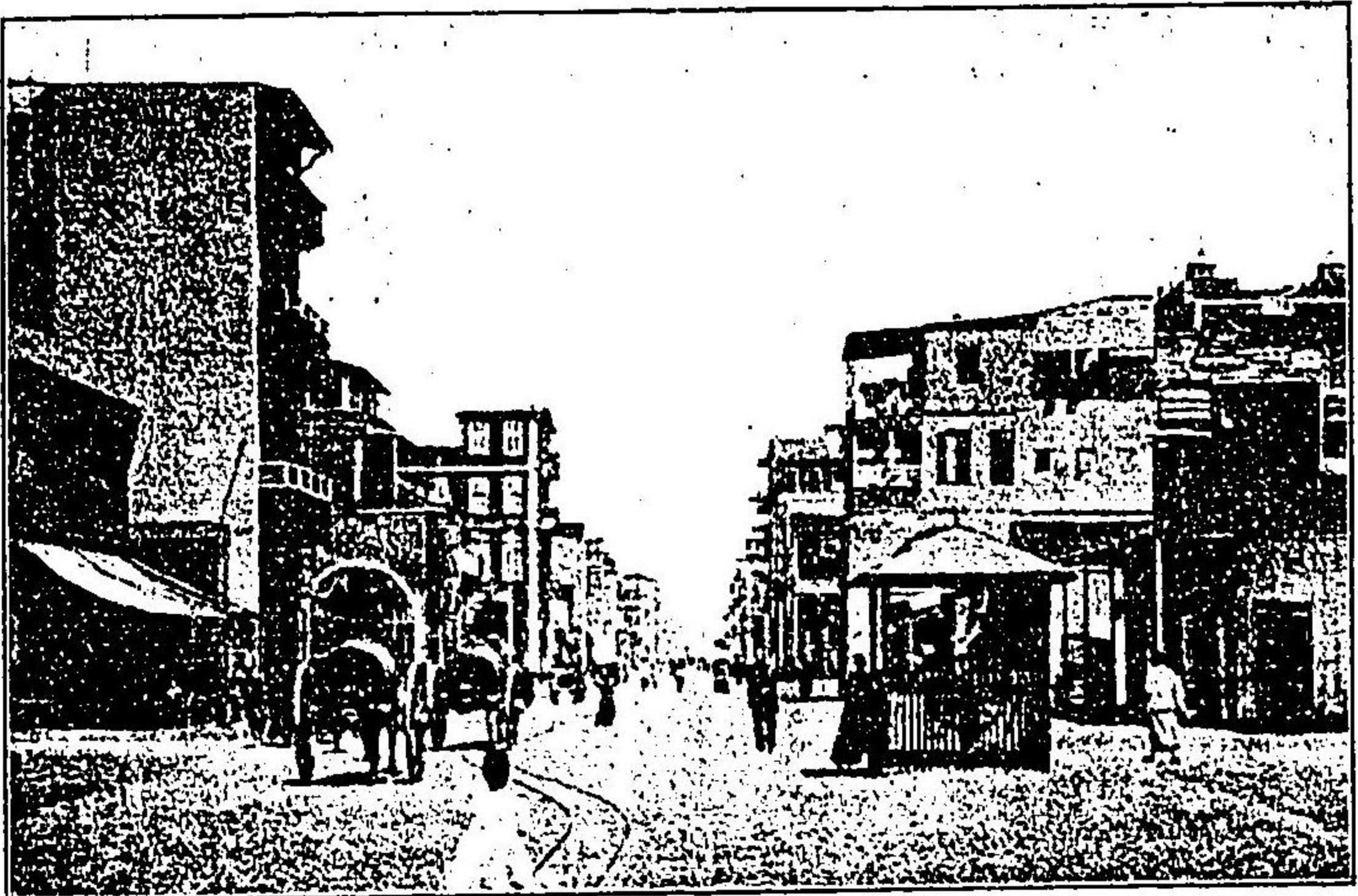
ス日本の金で約二十五錢だ。是迄の港に比して甚だ高價だ。歐羅巴へ近くなつたのだから値が高いのだらうと、誰か言つた。僕等がサンパンに乗つた時分には、既に石炭の積み込みを盛んにやつてゐた。唯見る石炭船も黒く、石炭も黒く、本船も黒い。其間に働いてゐる黒人が、石炭の大きな固まりの動いてゐる様にしか思はれない。船梯子を上下してゐる態は、まるで影繪を見る様なものだ。

大阪醫學校のK氏、同じくT氏、福岡醫科大學のO氏、高等學校のN氏及び僕の五人は、どこに行くかと云ふあてもなく唯ぶら／＼町を歩く。會て聞えてゐた通り、變なアラビヤ人が幾人もやつて来て、案内しやうとうるさく付け纏ふ。それを好い加減に遠ざけると、亦他のものがやつて来て、品物を賣り付け様として、いらぬと云つても何でも、いつ迄もあとに付いて来る。あるものは例のけしからぬ寫眞を出して、連りに買はぬかと、妙な笑顏をして人の顔を覗く。繪葉書屋に寄つて葉書を

買はふとすると、茲でも面白いものを見せるから、奥へ來いと引つ張つて行こうとする。小僧が變な腰付をしてサツクは入らぬかと聞く。彼等は人を何と思つてゐるのだらう、日本人は餘程與し易しとでも、思つてゐるのだらうか。

此の町の目星しき處は大概石造で立派であるが、場末や裏通りになると鳥籠を重ねた様な、一寸風變りな構造ではあるが、家が傾いてたり壁が剝げてたりして、哀れな氣がする到る處の通りにカツヘーやパイがあつて、軒下や道端にテーブルが列べてある。そこへ腰かけて、朝からビールやウキスキーを飲み、煙草を煙らしながら、ちろ／＼してゐる人が少なくない。僕等もカツヘーへ寄つてビールを飲み、ペンとインキを借りて内地へ出す葉書を認める。

黒人が赤い房の下つたトルコ帽を冠つて、畫家の着る長いブルーズに似た着物を着て、焼砂の上を跣足で平氣で歩いている。黒布で覆面し



ドイサトーボ

(元)
て、鼻柱の上に金管を下げた婦人が、頭の上に大きな壺を載せて、やはり跣足で往來してゐる。羊の一群を率れた小兒、烏籠を持った小娘、驢馬に乗った黒人、白服を着た白人、それらの往き來を眺めながら、ビールを飲み、ペンを走らせてると、亦案内者なるものがやつて來て、へちやへちや何とか彼とか言つてうるさい。遂には主人に怒鳴り付けられて、逃げ出したのは滑稽だつた。

十二時近くに船に返つて來た時には最早石炭積みは終つたが、船の上は一杯の石炭粉で一寸でも觸ると、黒く跡がつく。白人の小供が顔を眞黒にして、目だけ光らせてゐる工合はまるで黒人の眞似して遊ぶでるとしか思はれなかつた。

船は正午に解纜した。

ポルトサイドから五日目で、愈々マルセイユへ上陸するのだ。横濱を出てより四十四日の間、一日も早くマルセイユへ着きたいと願つて居たが、船に狎れ、人に馴染むで來た、今となつては尙ほ四五日も長く、船に居たい様に思ふ。

六月十一日

船は地中海に入る。

走
鰻の御馳



郵船會社の案内記には、地中海の條に、瀬戸内海の如く、八百の青螺碁市せるが如しと記してあるが、八百どころか一の島影も見えやしない。唯海も空も青いばかりだ。上陸が三四日の後に迫つたので、鐵道表を繰るやら、マルセーユへ着いたらホテルへ宿らうとか、税關がどうか、急に色々なことを評議する。スエズ運河を出てより、氣候は急に涼しくなつたので、甲板へ出てる人が大分少なくなつた。夕食に鰻の御馳走があつた。ポートサイドで仕入れたものだ。上海の鰻より柔かで甘かつた。

巴里 著

六月十七日

午前十時三十分巴里へ着いた。



S氏が迎ひに来てゐてくれたのが、何よりうれしかつた。早速馬車を備つて。ホテルスフロアへ

往つた。落ち付いた親切そうな女主人が出て来て、色々世話してくれる。自分等は一先づ應接室で疲れた體を休める。室には和田先生の書いた女主人の肖像や、日本の錦繪、富士山の寫眞、日本の扇などが掛かつてる。此家は日本人が得意だといふことを聞いて居た、それや是れやで自分も此家へ紹介されたのだから、斯く日本のものを見ると、何とはなしに、まんざら知らない所へ来た様な氣は起らぬ。昨夜マルセーユで少し、か、夕飯を取らなかつたのと、今朝汽車中で何も食はなかつたのとで、空腹でたまらぬ。で、カツヘーとパンを命じて二人してすゝつた。



ガ、ル、シ、リ、ヨ、ン

(三)

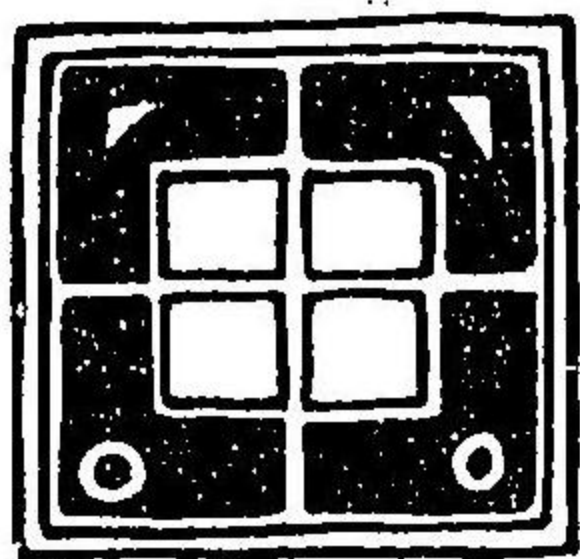
やがて二時になつたので、連れ立つてSの所へ往つた。Sの居る家は古寺の一間で、部屋は廣く、天井は高く、窓は三つもついでるから、至つて明るい繪を畫くには、好いとSは言つてる。Sの畫いた、長い靴下だけを穿いた女が、寢臺の上にひつくり返りてゐる繪や、肖像や、草花や、風景の繪が、古びた白い壁に掛けられてある。Sが、稽古繪を五六枚、部屋の隅から引き出して来て見せてくれた。例に依て

達者なものだ。夕飯にはまだ早いので、飯を炊かうと云ふので、肉と野菜を買つて来た。所へさつきスフロで一寸遇つたE氏、彫刻家農商務省練習生がやつて来る。次で先達で歸朝したI氏の好きだつたといふ女が来る。自分は日本を出る時、I氏から托せられた品物を、其女に渡した。女はもつと好いものを、送つて貰ふ筈だつたが、云はぬばかりの顔をして、其品物をいちつてる。此の女はIからの贈り物を受取りに、昨日もSの處へ来たのださうだ。女と行き違ひにR氏(京都出身洋畫家)が来る。四人して野菜を洗つたり、肉を切つたりして飯を炊いて食つた。

日本の畫界の話、巴里の話などで興が湧いて、歸る時分には十二時を少し過ぎてゐた。

(三)

初めてサ
ロンを見
る。



六月十九日

(三)

朝カツヘーを飲みに行つて、ルクサンプルを散歩して歸つて來るとすぐ晝だ。約束で、Sの處へ往つて炊き立ての飯に味噌汁をすふ。巴里で味噌汁とは第一の御馳走である。Sは日本にゐては炊事などにはどんなことがあつても、手出しなどする男ではないが、生來洋食が嫌いな爲め自炊生活を餘儀なくせらるゝ結果此頃では飯の炊き方、魚の煮方、中々手に入つたものだ。

飯がすむだ時分丁度、N氏が來たので、一所にサロンを見に行く。サロンの會場に這入ると、先づ規模の大きいのに驚かされる。兩國に建てられた國技館が大きいと云ふが、それ以上の二階建て、天上は總ガラス張りだから隅から隅迄、暗い所がない。階下は重に彫刻を以て充たされてる數百の白い石膏像の間には、翠

滴たる様な盆栽を以て彩どられてゐる。

階上は繪畫で、數千點の繪が殆ど隙間もなく陳列されてゐる。自分はよくも斯く集まつたものだと思つた。更に審査によつてはねられた繪が其十數倍もあると聞いては、出品點數の多いのにあきれるばかりである。陳列品の多い如く、亦種々雜多の流派がある。暗い繪、明るい繪、細かい繪、荒い繪、濼い繪、氣取つた繪、小供らしい繪、繪具を其儘カンバスへなすり付けた様な、生々しいしかし強烈な色彩の繪もある。先人の遺法を墨守してゐる人もあれば、飛び放れて新らしがつてゐる人、悪く言へば玉乗の看板見た様なものもある。小さいのは八號位から、大きいのは三四間位のものもある。

今日は日曜の爲めか、入場者が非常に多い。婦人が盛裝を凝らして、長い裾を引きすつてゐるのが目に立つ。入場する時裾を踏むなど、Sから注意されてゐるのだが、何分込み合つてゐるので踏みそうではらくする。

(三)

數多き繪を見て行く内に、自分等は非常に疲れた。で早く會場を出た
いと思つた。しかしわざわざ來たのだからと云ふので、同じ建物の中
にある新サロンに這入つた。

(三)



刻彫の上屋ンロサ

茲は受賞の沙
汰がなくつて
世間の人氣が
薄い爲めか、或
は他に理由が
あつてか知ら
ぬが、入場者が
至つて少ない。
少ないのは自
分等が繪を見

る爲めには甚だ好都合だ。繪も少ないし、陳列もゆるやかに、壁の色も
澁いくすんだ緑色だから、自分等の疲れた目には快よく感じた。當て
込みの繪の少ないのも氣持ちが好い。シモン、コツテ、シャバなどの繪
が出てゐる。自分等は設けの椅子に腰掛けて話した。

新サロンが、觀賞に適する様な陳列の方法を取つてゐるに、反して元のサ
ロンが、何でも御座れで雑駁な陳列法は、まるで御祭り騒ぎの様に思は
れてならぬ。

會場の出口には、ロダンの作大理石胸像二點が、特に優遇されて陳列さ
れてあつた。

巴里の寄席



六月二十三日

(元)

近所のレストーランで晝飯を済ませて、ルクサンブルを散歩していると、人がちろちろと自分の方を見てゐる。通りすがりの小僧迄後振り返つて見る。いやなものだ。夜Sとムーランルージュの寄席へ行く。室

内に設けられたるカツヘーの側を通つて、つき當りの散歩場で自分等
は見てゐる。

外題も歌ふ文句も自分には頓とわからぬ。わからぬけれど見てゐて
唯面白い。

さすがに藝術の發達した所として、背景の甘いには感服する。背景の
多くは舞臺の人を害さぬ程度に弱くしてあるから、踊り子の動作が一
々明瞭に浮び出てくる。それに電氣を惜し氣もなく使用してゐるの

で、背景に、踊り子の影が印する様な、へまなことがない。

踊り子が薄い着物一つで舞臺へ現はれ、椅子に腰掛けながら歌唄ひな
がら、長い靴下を穿く様な、際どい所を見せる様なこともあるが、観客も
平氣で觀てゐれば、踊り子も平氣で行つてゐる。

彼等が舞臺上の色彩の調和に苦心してゐることは、誰にでもすぐ看取さ
れる。譬へば、十數人の踊り子がオレンジ色の着物、同じ蔦色の髪の毛
の中に、一人眞黒な髪の毛のものを交へたり、やゝ暫くして三人ばかり、
濃い御納戸色の着物を着たものを出して、舞臺を右に、左に歩ませたり
する、自分等は唯其美しくしさに、酔はさるゝばかりである。こう云ふ場
所に入入してゐるのだから、巴里の女の裝飾に上手なものも、最もなことだ
と思ふ。

自分等が舞臺に見入つてると、いつの間にか、大きい帽子を冠つた、口を
赤く染めた女が側へ來て、鳥の羽で自分の頬をなせる。知らん風を

(元)

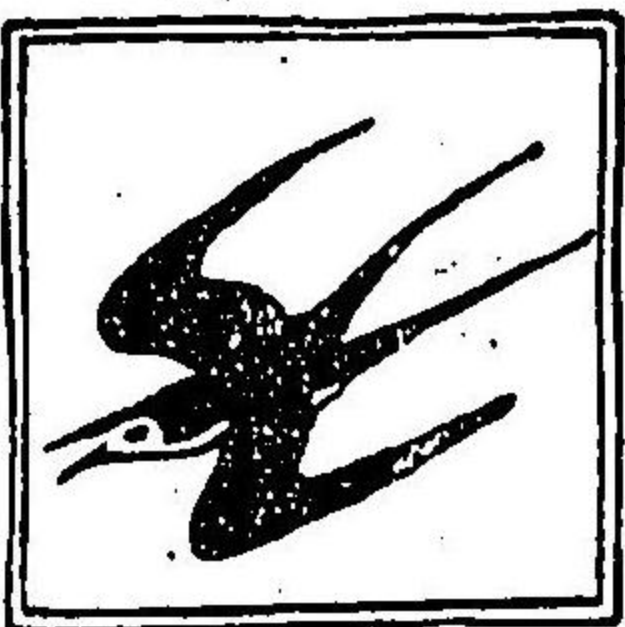
してると亦帽子をつゝく自分ばかりかと思ふと、Sへもそんないたづらをして往つてしまふ。彼は人が見てゐるやうが見てゐないが平氣でやる。對手は女だ、怒るにも怒られず仕方なしに苦笑してると、近所に居る女どもがくすくす笑ふ、何だか自分等は馬鹿にされてゐる様だ。其内に幕が下りた。二人は眞先きに通へ出た。

(四)

六月二十六日

今朝より僕は六階に住むことになつた。

今迄は三階の廣い綺麗な部屋に居たのだが、月に八十法も出ては、貧乏學生にはやりきれぬので四十法の部屋に移つたのだ。

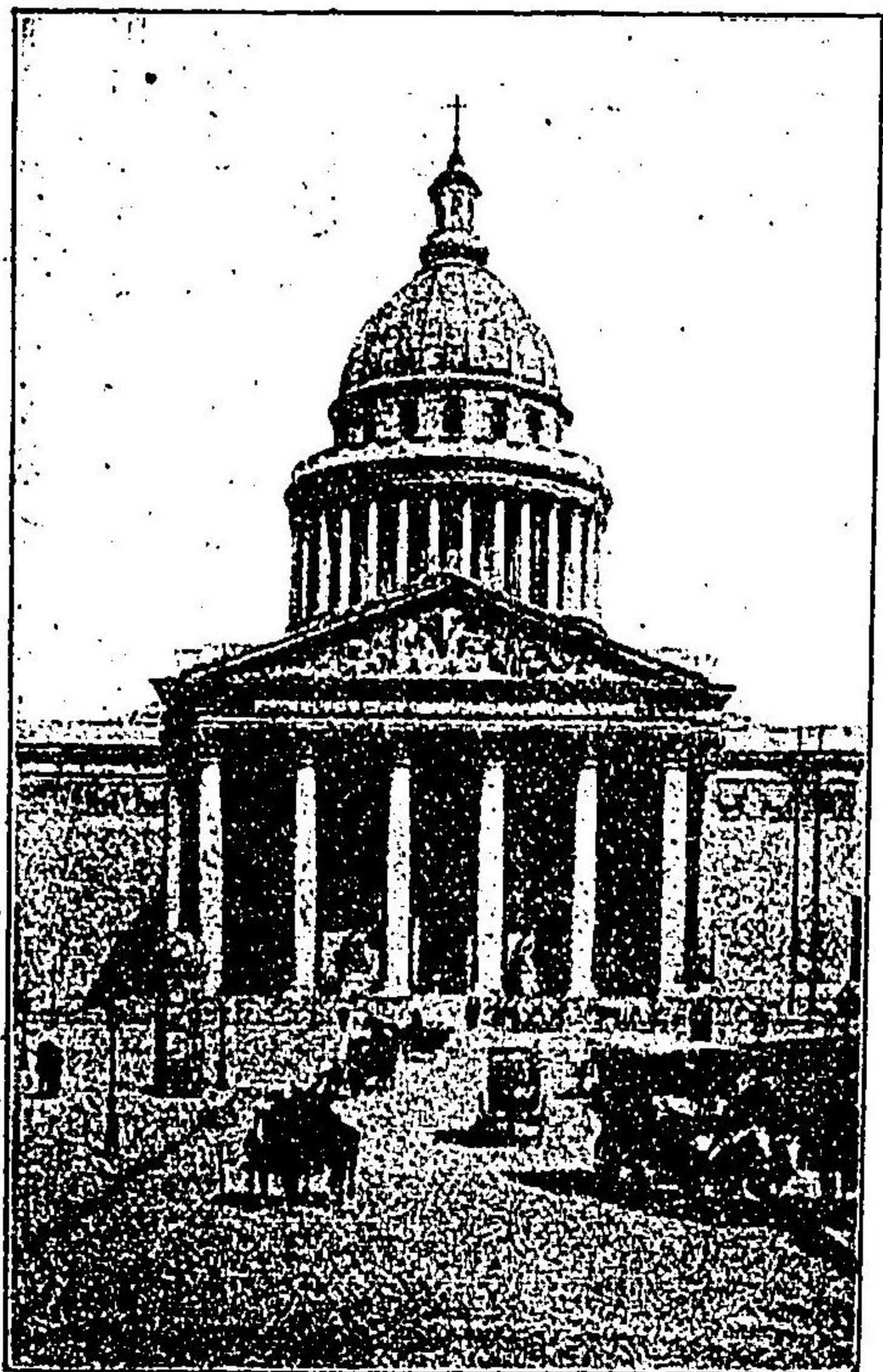


六階上の
住居

今度の部屋は八疊位の廣さで、其内に寢臺、鏡立、ストープ、洗面器具、椅子、テーブルなどあるので、日本の八疊の間に一人居るやうなゆるやかな

わけにはゆかぬ。

窓は三尺に五尺位なので、一つしかないので、部屋の内は薄暗いので、繪を畫くのには不適當である。當分繪を畫かぬからそれはまあ好いが、



ンガテンバ

茲に最も閉口するのは、階子の昇り降りだ。外から歸つて來て、勞れた足で階子段を、一つ一つ踏みながら六階迄昇ると、がっかりしてもう何も

(五)

(三)

する元氣がなくなつてしまふ。亦外へ出掛けて、忘れものをしたとか雨が降りそうだから洋傘を取つて来ようと思つても、遂面倒になつて途中で降られるとは知りながら、其儘出てしまふ。しかし、それも自分の部屋と極まると茶もカツヘーも落ち付いて飲めるから心はのんびりする。最初に書いて置くことを忘れたが僕の住むで居る所は、カルチーラタと云つて本郷の様な書生町の先達てゾラを國葬にするとか、しないとか云つて騒いだ、かのパンテオンの附近に居るのだ。

六月二十六日

今日初めてルーブルへ行く。

途中で雨に遇つたので、近所のカツヘーへ飛び込むで、雨の止む迄そこで待つて居た。巴里に

ルーブル、

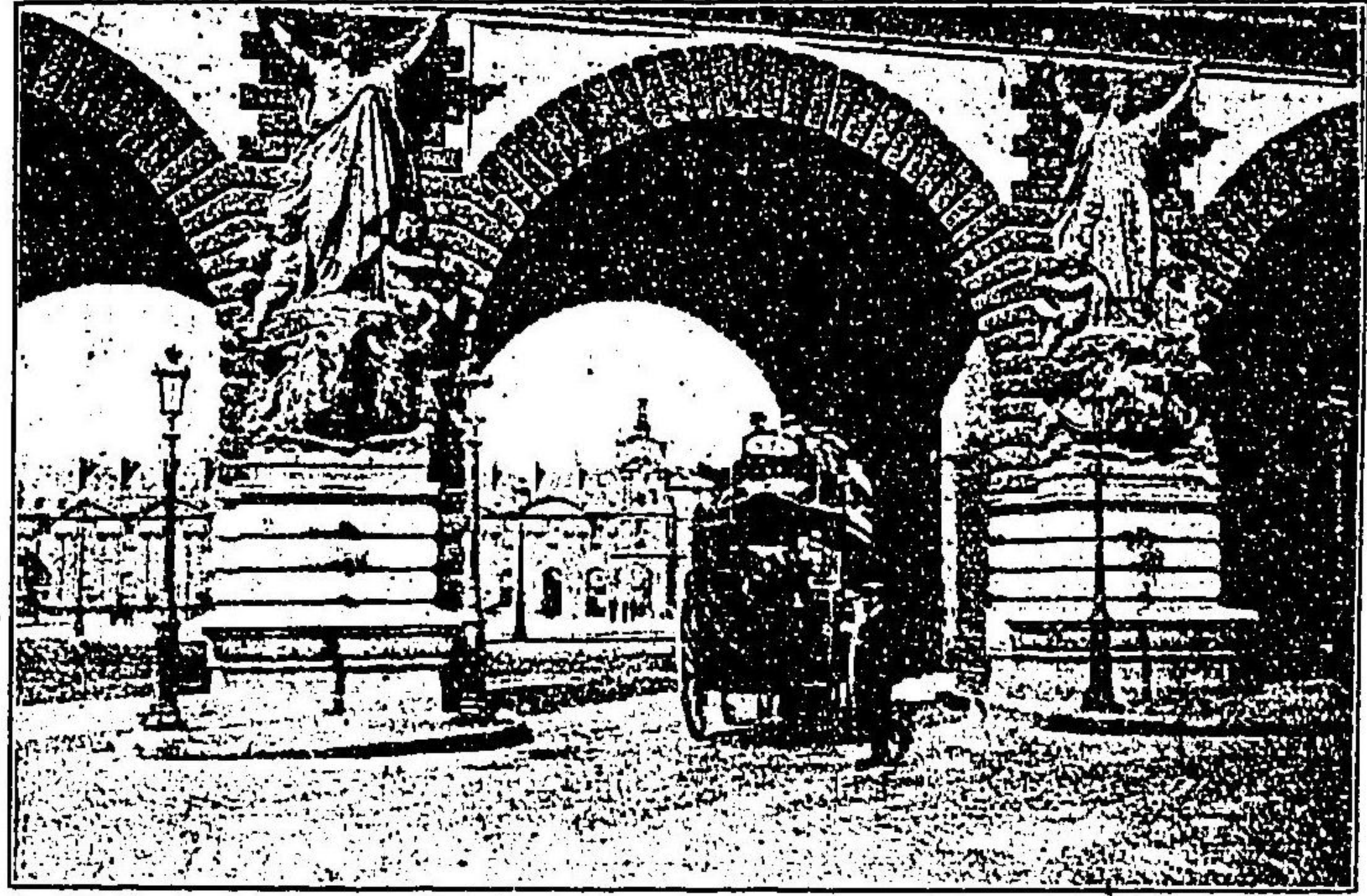


は全市到る所に、カツヘーがあるから、こんな時には最も都合が好い。そこで紙を貰つて手紙でも書ば、重寶なのだがまだそこ迄はツウくしくならぬ。

ルーブルへ往つて自分は直ぐ繪畫の陳列してある二階へ上つた。どこにどう云ふ名畫があるのか、どこが何世紀の部屋だか、更に知らずに唯氣の向くまゝに見て歩く。その中に寫真版で見で知つてる繪が、ちよいちよい目に付く。何かしら懐かしい様な氣がして、遂其物に見入る。寫真で、此の繪は大ききさそうだとか、小さきさそうだとか、思つてたのが、案外小さかつたり大きかつたりする。殊にラフハエルの繪と、ホルバインの繪の小さかつたのには意外な氣がした。ダビンチ、ラフハエル、レンブラン、ヴェラスケス等の繪の前には、常に人が足を止めて見てゐる。

名畫の摸寫をする人の多いことは、話に聞いて居たより以上である。

(四)

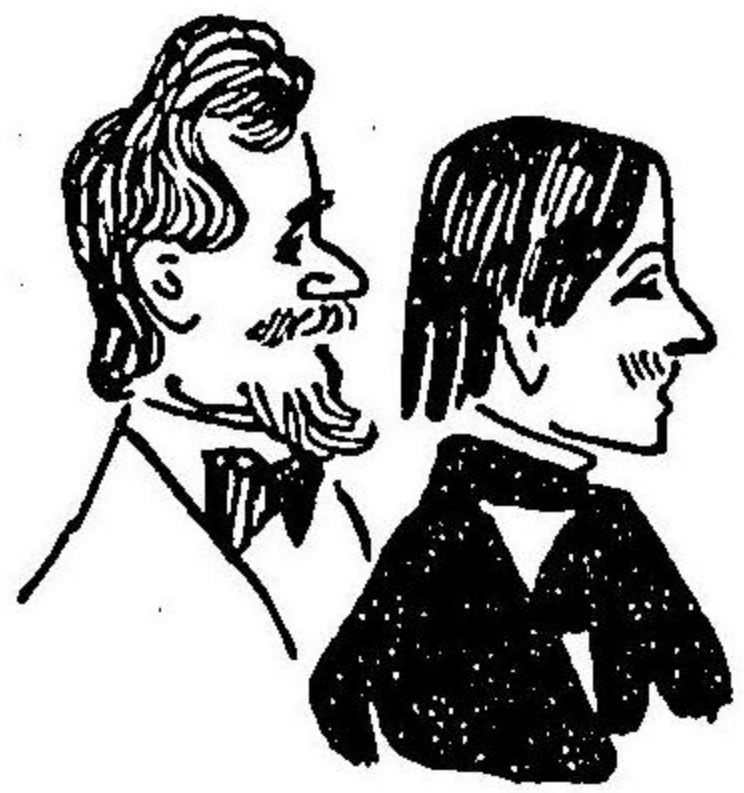


ルヴールの入口

(四)
お婆さんや、お爺さんが、キャンパスに顔をくっつける位に近寄せて細い筆でつゝついてるかと思ふと若いお嬢さんが反り身になつて氣取つて書いてる。模寫される繪の多くは、普通何人も知つてる。大概相場の定まつた代物だ。研究する爲めに模寫する人は少なく、其過半は賣る爲めに模寫するのだから、定評ある繪が都合が好いのだ。既に模寫が終つてもどこかしかいぢつては亦其邊をぶらぶらしてゐる。亦書いてはす

ぐ休む。彼等は斯く同じことを繰り返へしてゐる内に買手を探すのである。ルーブルの寶庫も、彼等に取りては一種の商買場所とより外思れないのだらう。
ルーブルに居ること約五時間ばかりで家に歸つた。そして何が頭に残つてるかと考へて見た。名畫と云はるる繪が、數限りもなくあるので、一々それらの繪を見て居た自分の頭は唯もうぼーつとして、どの繪がよかつたか、悪かつたか纏まつて覺えて居らぬ。しかし、始から終迄、殆ど黒い色と、オレンジ色の間を歩いてたことを、單に記憶してゐる。

グロツキ



七月二日

(興)

午後五時一寸前にグランションメールのク
ロツキに往く。

近所で筆と鉛筆を買つて、畫室に這入つた。
畫室には幾人かの男女の畫學生が畫架を立
てたり、鉛筆を削つたりして、モデルが臺に上
る時間の來るのを待つてゐた。

五時の時計が鳴ると共に、モデルは裸體になつて色々な形を見せる。
自分はまだ形の極らぬ前、そのモデルがあまり瘦せて氣に喰はぬから、
そこを出てすぐ隣りにあるアカデミーコラロツシーの方へ往つた。
こゝでは既に形が極つて、モデルが後向きに立つてゐた。髪の毛の黒
い、色の白いイタリアの女で、手や足の釣り合ひが申分のない位よく整
つてゐる。自分等が終始日本で見えてゐた、頭の大きい胴の長い、足が短

かくつて太い、手首に締りのないモデルとは大分違ふ。畫かずに、唯見
てゐても氣持の好い位だ。氣持の好いと云へば、茲で畫いてる畫家程
氣持の好いものはない。上野の美術學校や、其他の畫室で稽古時間に、
誰が屁を放つたとか、誰が笑つたとか云つては、合槌を打つて、がやがや
騒きながら畫いてる所を經來つた自分には、茲の畫室が不思議な程靜
かなので、これで愉快に畫いてるのかと怪まれる。音のするのは唯鉛
筆の紙上を走る音と、時々鉛筆を削る音のする位のものだ。人々はモ
デルと自分の繪とを見ながら鉛筆を動かしてゐるに過ぎぬ。だからま
るで頭と手を動かしてゐる生人形の様だ。遅れて這入つて來た自分
は、椅子を動かすのに音のするのを申譯のない様に思つて冷汗が出る
位だ。

モデルは同じ形を四十分位續けて、一先づ休みたる後、亦別の形に移る
其休み時間はどこの畫室も同じことで、煙草をふかしたり、戲談を云つ

(望)

たり中々賑やかである。

クロツキーには誰でも来られる。極まつた月謝と云ふものがなく、歸り掛けに五十文を拂へばそれで好いのだ。時間は五時より七時半頃迄で、形は四度變る。だから極めて短かい時間に、極めて速かに寫し取らねばならぬ。極めて速かに、其物の氣持ちを取ると云ふことは、畫家にも最も必要なことだ。人々は其稽古に来るらしい。最も中には、何かの材料にする爲めにとか、日中暇がないから夜來るといふ人もあるのは無論であらう。或は線だけ研究に來ると云ふ少しは名のある畫家も、稀には見えるそう。

小林君の畫室が、菊坂にあつた時分には、クロツキーも度々行はれたが、それも長くは續かずに有耶無耶になつてしまつた。日本ではまだクロツキーの爲めに毎夜畫室を公開する程畫家にまだ油が乗つてゐないのだから、長く續かぬのも無理はないが、こう云ふことは月に一回と

とか、或は二回とか、この畫室でも必ずやつてほしいと自分は思った。

七月三日



SとHと來る。菓子を買つて來たから茶を入れろと云ふ。しばらくしてNも來る。室の内で話してゐるのもつまらなくなつたので、一所にセーヌ河畔をぶらぶらしながら動物園に往つた。

動物園は植物園をも兼ねて居るので、各種の動物は、緑の草、緑の樹の間に作られてある。大きな檻の中に別々に畜はれてある。自働車や、馬車の劇しく通る街を逃れ來て、ラクダが間の抜けた首を柵の上に載せてパン切れをほゞばつてるのや、孔雀が鹿の居る柵の上へ止まつて、羽蟲をつゝいてゐるのを見ると、氣がのんびりして生き蘇つた様だ。

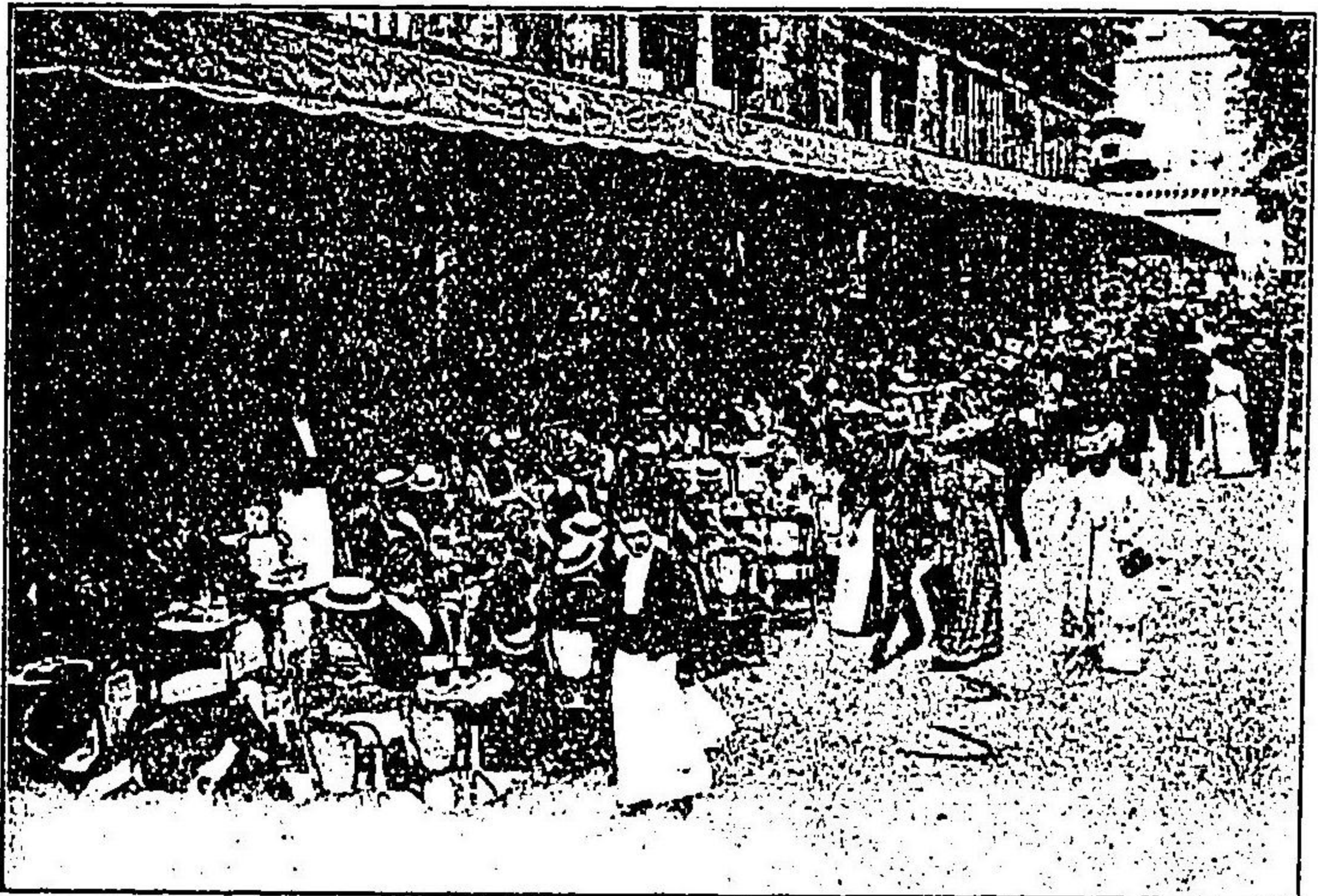
僕等がそれからそれと見て歩いていると、そこに見てゐる外人の一團が、一様に僕等の方を振り返つて見る。僕等が汚ならしい爲めか、珍しい爲めか知らぬが、兎に角場所がらだけに、變な動物が來たな位に思つてるのかも知らぬ。
澤山の目で注視さるゝと云ふことは或る場合には得意なものだが、或る場合には不快なものだ。

七月四日



五月雨之
巴里

此頃の天氣は實に不快だ。一日曇つてるか、さもなければ雨だ。雨も夕立の様に胸のすく程ざあつと降つてくれば、却つて氣も晴々しやうが、此頃の雨は、女がめそめそ泣く様な雨だ。たまたに青い空に白い雲を見ることもあるが、それもほんの僅かの間で、すぐ曇つてしまふ。同じ



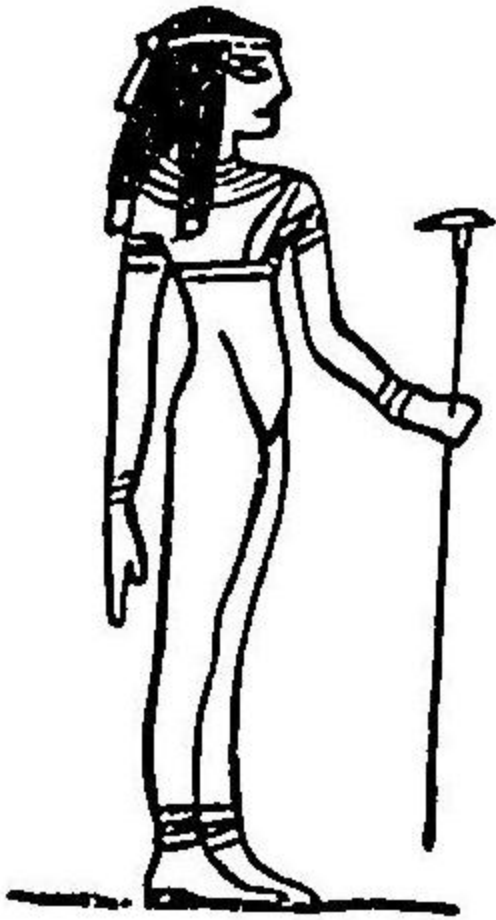
カ ッ ヘ - の 前

様な天氣が毎日繰り返されるので、部屋の内がじみくして机掛けや夜物の物など、氣持の悪い程濕氣を帯びてゐる。煙草を吸はふと思つて、マッチを擦つても、マッチが濕つて、更に火が點かない。で亦新にマッチを買つて來ねばならぬ。それも日本の様にマッチが安ければ、いくら買った所で高が知れてるが、玆の様に一箇(日本のマッチと同じ位の大きさ)四錢も取らるゝマッチを買つて來

るそばより濕つてしまつては、甚だ閉口である。佛國ではマツチも煙草も政府の專賣だから、目の玉の飛び出る程高いのも無理はない。天氣が悪いので、夏だと云ふのに氣温は非常に下つてる。自分は今冬服を着てるのだが、それでも時々寒さを感じる位だ。日本を出る時より白い服に、赤や紫や緑や黄色の洋傘を差した、巴里の女が公園を散歩してる様を頭に畫いて、それを見ることを楽しみにしてゐたのだつたが、此頃の様な天氣では、その願ひは叶ひそうもない。

夕方N君來る。一所に飯を食ひに往つて來て、室で話してたが何となく寂しい、近所のカッヘーの前だけでも通つて、せめて花やかな燈火の煌きでも見て來うと、連れ立つて出て行く。

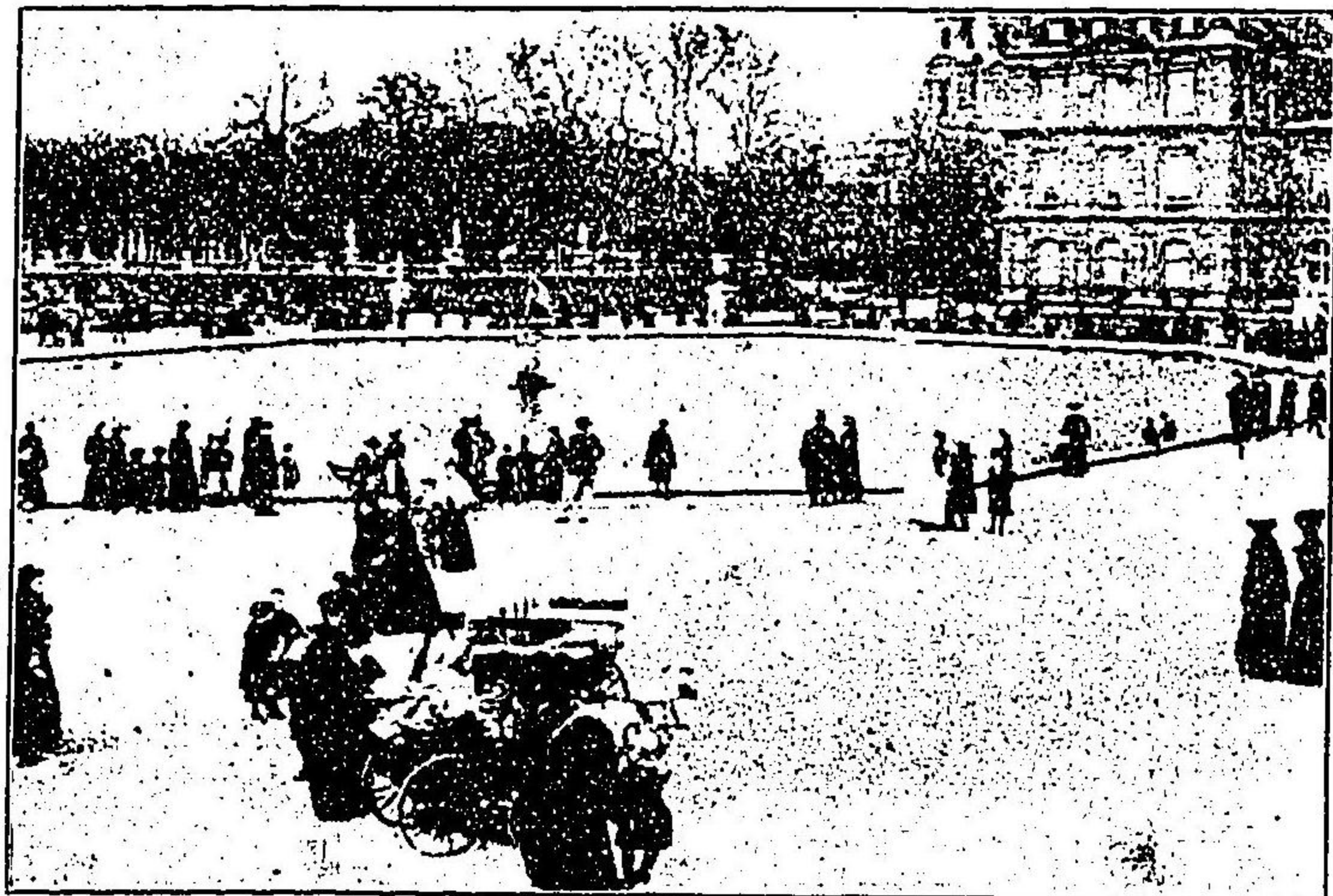
里芋之葉



七月七日

里芋がルクサンブル公園内のセナの建物に近きほとりに、丸く盛り上げた土に植ゑられ、廣き葉を風になぶらせながら、冠り振つてるのが珍らしい。

紅鯨色をなせる其莖、間の抜けた様な形の葉、風に揺れる其様の野趣ある中々に捨て難き所



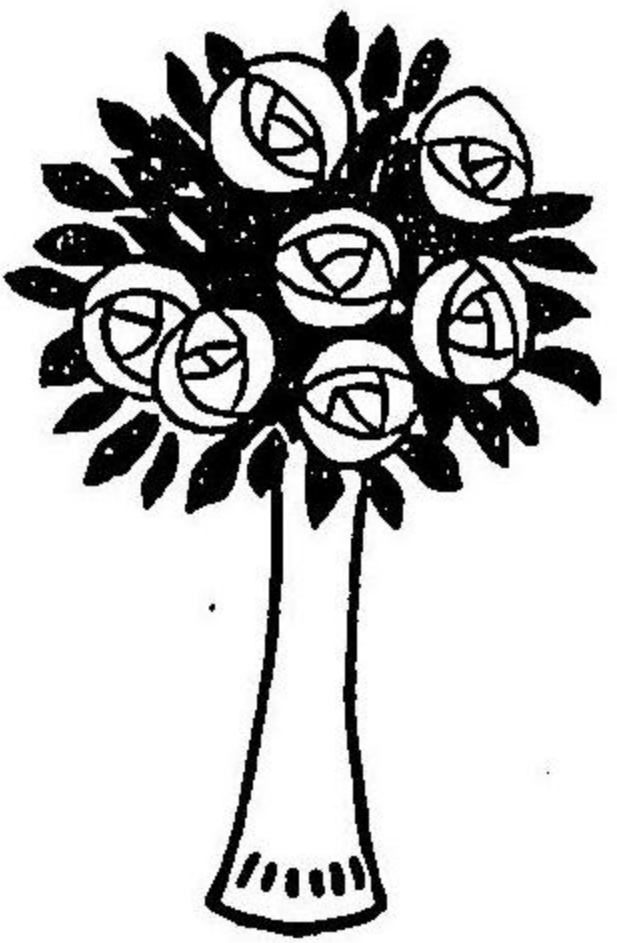
ルクサンブル公園の園

(語)

があるが。しかしそれが腐る程ある日本に於いては、あまりに見狎れてゐる爲か、誰あつても公園或は花壇に、植ゑ付け様とも思はぬ。私は、日本の植物温室で大事に育てゝる熱帯植物が、シンガポールでは、路傍に雑草と共に生ひ茂つてゐるのを見て、甲の國で珍重するもの、必ずしも乙の國で珍らしきものでないことを思つた。

此の平凡な事實が、藝術上には今堂々として幅をきかしてゐる。巴里に於いては、東洋趣味の交つたる似而非繪畫を見、日本に於いては、自ら巴里の風潮を傳へたりと自惚れてゐる出鱈目藝術を見る。あゝ何れか是なる。

巴里の風呂



七月十日

巴里へ來てから今日初て湯に行く。

しばらくの間湯に入らなかつたので垢が溜つてゝ手拭で擦する度に、垢がぞろぞろ落ちる、落ちるのが目に見えるので、

其度に身が少しづゝ清らかになつてゆくと思へば、まんざら悪い心持ちもしない。

湯銭は一回約三十銭位要かる。一人別々の湯槽で、熱くすることも温くすることも、自分で自由に出来るから其點は便利だが、湯はやはり日本式に限ると自分は思ふ。

朝早く起きて、一風呂浴びて來て味噌汁で飯を喰ふとか或は熱い湯から上つて傘をさして細雨の中を歸る、自分にはそれが何とも云へぬ好い心持ちだ。處が西洋流に湯から出てすぐズボンを穿いたり、靴を穿

(語)

いたり窮窟なカラーを付けたりしては折角好い心持ちになつたのが、何にもならなくなつてしまふ。どうしても湯は日本式に限る。外國に居る日本人の多くが月に一回或は年に四五回位しか湯に入らないと云ふのは必ずしも湯銭が高からと云ばかりではないらしい。

七月十一日

葬式へ



I. M 氏の葬式に會せん爲めペールラシ
ューズへ往く。

I. M 氏は日本の或學校の彫金科を出た人で長らく巴里に居り近頃日本の美術品店を開いた人だ。開店早々に三百法位の収入があつて前途益好況を呈するであらうと人が皆望みを掛けてゐたのだつた開店してまだ一ヶ月にもならぬのに肺を病むでしばらく病院で静養してたが恢復の望みなく遂に一昨九日病院で歸らぬ客となつた。

自分等は葬式の時間に少し遅れた爲め墓地へ着いた時分には既に歸り掛ける幾人かの同胞に出會つた墓地の門を入るとすぐつきあたり有名な彫刻死の門がある。會てマルセーユのミュゼーで見れた死の門の原型に對しては唯技術を翫賞したゞけに止まつたが茲にある死の門に向つては技術を離れてつくゞ死と云ふことを思はせられる。細雨が降つてるのでミカゲ石の彫刻面は殊に冷やかに見える。生花や造花の花輪が飾られてある白い石の墓標や黒い石の墓標の間を通つて式場に到れば式場の石段の上に知友より贈られた花輪が雨に打たれながら寂しく供へられてあつた。其側に立つてゐた友の山高の黒い帽子が雨にぬれて光つてゐた。七八人の親しき友は今焼かれつゝある遺骸の骨上を待つてゐた。自分等は其人々と共にしばらく話してたが骨上の終らぬ前にそこを辭したそして再び死の門を見た。

其晩四五人の友とカツヘーで話した。T、K氏の事や、僕の巴里へ着く前日、やはり肺を病むで死むだ〇氏のことや、以前に同じ病に懸かつた人や、今現に肺を病むで、田舎にゐる或る學生のことや、其人々の噂が出た。

巴里で死ぬ多くの同胞が、云ひ合せた様になせ、肺病で死ぬか、これには多くの原因があらう、日本にゐた時より、多少其氣のあつた人が、無論多からうと思ふが、しかし巴里で特發した人も無論ある、其原因は何だらう。

巴里に来る人の中には、月々僅かな費用で修業をしてる人が幾人もゐる、巴里の如き多くの費用を要する所へ来て、僅かな費用で、修業もし、参考品も買はふと云ふのだから、勢無理をして粗食をする粗食も静かな田舎とか海岸でもあれば、そんなに體にも障るまいが、巴里の様に自動車や馬車や電車が引つ切りなしに通じ、街を横切るのに前後左右に氣

をくばつて、馳せて通らねばならぬ様な所、色々なものゝ響きが、朝より夜、夜より朝迄、絶えず耳に響いて来る所。空氣が溷濁してゐて、重苦しく感ずる所。種々なる刺戟で、いつも氣がいらくゝしてゐる所。こんな所にゐて粗食しながら勉強して、た日には、到底體が堪えらるゝものではない。

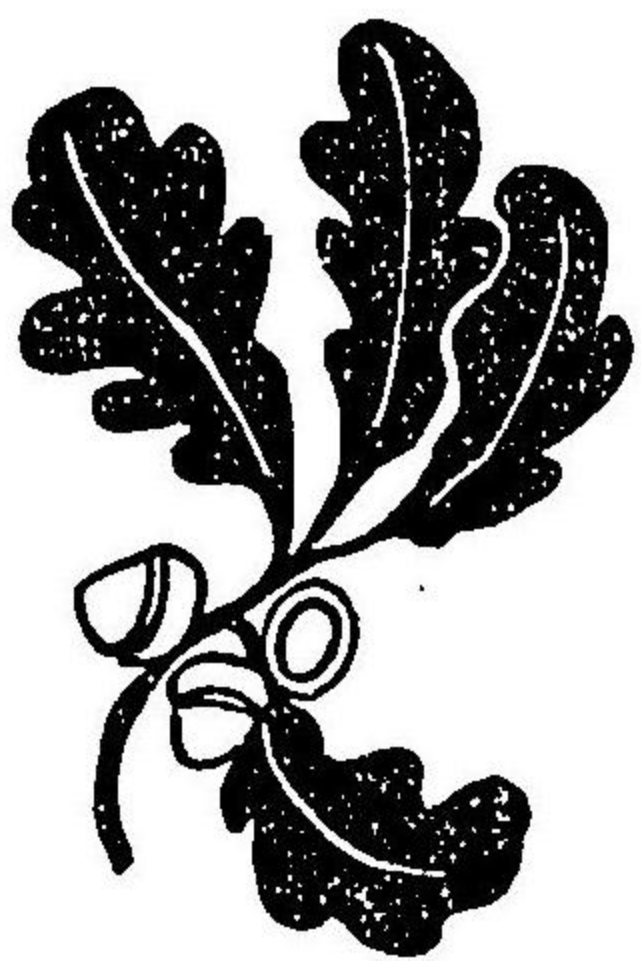
これが病を引き起す一つの原因だ。も一つは夜深しと、女買ひとである、巴里では、何でもなく夜深しゝてしまふ程、誰にでも愉快に夜深し出来る様な設備？が備はつてゐる。一寸友達の處へ遊びに往つて、十一時頃になつて歸ると云へば、まだ宵の口じやないかも少し居ると屹度云ふ。

宵の口、成程、茲では十一時頃は、まだ宵の口かも知れぬ。或るカツヘーなどは、十二時頃から人がぞろ／＼やつて來ると云ふし、或る寄席などは十二時頃に開くと云ふから。

(三)
夏の夜深しはまだしも、冬の凍る様に冷たい、茲の乾いた空氣——日本の濕氣を帯むでる空氣とはまるで違ふ——それに曝さるゝのだから氣管を痛めることは知れ切つてる。最も健康な人は左程にも感じまいが、女買ひ、女買ひのことに就いては、自分はこゝに書くことを欲しない。唯それに連れて、煙草は吸ふ、酒は飲む、夜深しはする、だらしなき生活は續けらるゝ。これが第二の原因らしいことを單に記して置く。
こんな會話が重に御互の間に交換された。

七月廿二日

コラン先生



午後久米先生につれられて、S氏F氏及び佛人K氏と共に、コラン先生のアトリエを見舞つた。

自分が初めてコラン先生の繪を見たの

は、今より十年ばかり前、黒田先生の畫室で、あつたと記憶してゐる。其繪はノルマンジの婦人と云ふ題で、鮮やかな緑を背景にして、白い手拭様のものを頭に被つた若い女が縫物をしてゐる繪だつた。其後各種の小品及び木に凭たれた白衣の婦人の大作を見るにつけて、先生の淡雅な趣味、秀麗な線形、鮮麗な色彩に非常に興味を持つた。先生の繪にどこか意氣な處があるのも自分にはうれしかつた。そういふ繪を畫く先生はどんな様子な人だらうかと、自働車の中で色々想像して見た。今日は朝から細かな雨が降つてゐる。車より降りて先生の家の門を這入ると、紅がら色に塗られた、アトリエの前にある石彫の虎が、雨にぬれて物愛げに頭を擡げてゐた。
久米先生が畫室の戸をたゞくと、やがて繪筆とシャボンとを持つて、頭の毛の白い、鼻の大きい、大きな體格の人が出てこられて、久米先生と話してゐる。久米先生も随分大きい、其人は更に丈が高く、肉付きが立派

である。此の人がコラン先生なのだ。先生は今仕事をしてゐたので手が汚れてゐるからと云つて、小指で皆に愛憎よく握手される。そして書室の側にある水道で、筆を無難作に洗つてしまはれる。

書室には半書きあがつた大きな壁畫が二三枚立て掛けてある。先生は其繪を指して裝飾畫だから普通の繪とは、描き方が違ふと云はれる。書室には其壁畫以外、何も目を喜ばすに足るものがない。書室も甚だ粗末なもので、到底長くそこに籠つて、繪を書いて居らるゝ様な處ではない。曾て寫真で見た歐洲の大家の書室の模様が頭にあるので、先生の書室も定めし快よいものであらうと想像してゐた處が、あまりに修飾してないので、少々勝手が違つた様に思はれた。

しかし、二階の書齋兼用の書室に導かるゝに及むで、これあるかなと思つた下の書室は、要するに唯ほんの仕事場であるのだつた。天井の高い書室の北側は一面のガラス張りであるから、雨天にも拘はらず室内

は極めて明るい。他の三方の壁は、沈むだ色で塗られて其上に、古雅な東西の陶器、刀劍、各種の面人形が廣い壁に、隙間のない位に多く掛けられてある。左手にある大きなガラス棚も、古器物で充満されてある。色の寂びたエジプト模様の敷物が、何枚か敷かれてある其上に、三つの書架が据えられて、曾てサロンに出品されたことのある裸體畫が置かれてある。書架の右手にあるターブルの上には、書狀や雜誌がごちやごちやになつて載せられてあつて、畫家の投げ遣りな氣質が窺はれる。裸體畫の一枚は、女が緑の草の上に腹匍ひになつてゐる繪で、赤味を帯びた臀部のあたりが、美事に出來てる。一枚は立木に凭り掛かつて、横を向いてゐる女で、描き方も、色も、調子もさつぱりした繪だ。一枚はやはり木に凭たれて、正面を見てゐる繪で、日光に輝いてゐる緑の草の色と、黄色を帯びた肉體の色とが、實に好い調和をなしてゐる。他に先生の妹を畫がいたものと、二十歳前後に描かれたといふ肖像がある。此の二枚は

(奇)
古い時の作だから、無暗に黒っぽい色を使つて浮き出る様に描かれてある。それと作風が變つてからの繪とを比較して見ると、却々興味がある。

僕等はガラス窓の下に長椅子に腰掛けて、數多くの先生の繪の寫眞を見て、先生は非常に裝飾的頭腦に富むであらうとか、だからどれこれ形にいやみがなくつてのび／＼してるとか、小聲で話す。

先生は久米先生とK氏と共に力のつばをいぢくりながら、何かしら切りに話してゐらるゝ。先生の聲は太く、久米先生の聲は澁く、K氏の聲は黄いろい。

話してゐる中にいつか畫室が暗くなつてきて、裸體畫がぼんやり見えて来る。時計を見ると六時過ぎだ。長き夏の日ももう暮に近いのだ。

温味のある、快よい先生の畫室に、少しでも長く止まつてゐたいが、あまり長座をしてゐるのも、心なき仕業であると思つて、我等は先生に御暇

を告げた。先生は笑を湛えながら亦來いと云つて、温かな大きな手を出して、一々握手された。

七月廿六日

セイヌ河畔を散歩していると、河に釣を垂れてる人と、畫架を立て、寫生してる人とか如何にもものんきそうだ。

セイヌ河
の釣り



セイヌ河の兩側は、廣々とした並木のある通りで、河に沿ふて、四尺位の高さに疊むだ石の堤防がある。堤防の下に荷上げ場や、荷車の通行の出来る岸が続いて、堤防の處々にある石段より上下することが自由になつてゐる。そこで釣を垂れたり、繪を書いたりしてゐるのである。河船の往來繁き所、激しき音響の絶え間なき、大都會の中央を貫流するセイヌ河の様な所には、魚らしい魚は一疋もゐない様に私には思はれ

(室)